
サムライHUNTER

NISIOISIN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サムライHUNTER

【Zマーク】

Z2698V

【作者名】

ZISHOISHI

【あらすじ】

若くして死んでしまった俺は神の力でHUNTERXHUNTERの世界へ転生する事になった。
よし原作知識で死亡フラグを回避だ!……記憶が消されてるだ
とー?

主人公設定
(前書き)

ネタバレあり

主人公設定

名前：ムサシ

性別：男

出身：ジャポン

年齢：15歳（287回ハンター試験時）

系統：特質系能力者

特技：剣術

能力：右手に剣を左手に盾を
追爪する五つの印

鬼努私落

【能力解説】

? 右手に剣を左手に盾を（ナイト・オブ・オーナー）
具現化系能力

剣と盾を具現化する事ができる

最大で剣は13本、盾は1つ具現化可能

大きさよりも強度を優先しているため大きさは3M辺りが限界
盾には自動防御の能力がある

『制約と誓約』

具現化した剣の数が1本・形状が日本刀である時のみ、オーラ又は

人間以外のオーラを纏っているものは何でも斬れる能力が付く

『応用・派生』

? 剣の雨（ブレイドシャワー）

操作系を加えた応用

具現化した剣を操作して相手に飛ばすのが主な使用方法

? 剣の風（ブレイドソニック）

放出系を加えた応用

剣に纏わせたオーラを相手に飛ばす

相性の問題で威力は低いがスピードのある攻撃

? 剣の炎（ブレイドライジング）

強化系を加えた応用

具現化した剣を強化するが相性がもつとも低いため効果は弱い

? 追爪する五つの印（ストーキングマーキュア）

特質系能力

印をつけた所へ瞬間移動する能力

『印をつける手順』

? 右手で対象に触れる

? 觸れた状態で「チエック～番」と言つ

? 自分の右手の爪に唱えた番号が刻まれる

? 相手にも見えない印が刻まれる

『制約と誓約』

触れる対象は生物でなければならぬ

印は右手の爪の数までしか刻むことが出来ない

一度印を刻んだら、対象が死ぬか印の刻まれた自分の爪を剥がさ
でないと印は消せない

1日に5度までしか使用できない

一度目の使用から24時間経過でリセットされる

除念で外すことは可能

? 鬼努私落 (フォー・オブ・ペルソナ)
特質系能力

自分の中に「鬼」「努」「私」「落」の人格を形成する能力

? 鬼の人格

ヒソカに匹敵する殺人鬼の人格

一人称は「オレ様」

人を殺すことに躊躇いを覚えていたムサシが、それでもこの世界で生きていくために躊躇なく人を殺す為に作った人格

転生者であるため元々が一般人のムサシには必須だった

殺人に躊躇いが無くなることで大幅に戦闘能力が向上する

この人格の時のみ念能力
『フレイドハッピーエンド』
『斬斬舞舞』を発現

? 怒の人格

激しい怒りを司る人格

一人称は「オレ」

性格は狂暴ではなく、むしろ冷静で穏やかな性格（スーパー・サイヤ人のような感じ）

この人格の時には強化系能力者になる

? 私の人格

元々のムサシの人格

一人称は「俺」

元々のムサシの人格をベースにして造られた人格

4つの人格の中での主人格的存在で、この人格が他の人格に知識を与える権利と知識読み取る権利を持つ

? 落の人格

冷静沈着な落ち着きとかなりの集中力を持つた人格

一人称は「僕」

この人格の時には具現化・操作の能力精度が上昇したり円の大きさが広がる

『制約と誓約』

他人格の間では記憶の共有ができないつまり、ある人格が表れている時は他の人格は眠っている状態にある（知識の共有は条件付きで可能）

『応用・派生』

バラサイトマインド

? 寄生人格

特質系能力

生物に対して鬼・怒・落の人格を寄生させる能力。

私の人格の時に、絶の状態の相手に触れることが条件。

寄生させられた相手は、記憶・知識・思考・感情の全てが、私の人格に筒抜けとなる。

また、寄生させていた人間が死んだ時、寄生していた人格が身体の主導権を得ることが出来る。

【詳細】

原作知識を持つた転生者（GIに入るまで）

ジャポンの伝統的な武士の家系に生まれた為、かなり幼い頃から鍛錬をしてきた

それ故、念なしでも相当強い人間に部類される

絶や隠は得意だが円は苦手で5~10mが限界だが、それを補う直感の良さがある

容姿はBLEACHの朽木白夜（過去編）

転生開始 そして異世界へ

いつも通り剣道の朝練の時間に起床した俺は、自分が何もない真っ白な空間で目覚めたことに気づいた

「何だこれ……夢なのか?」

「こや、夢じゃないぞ」

咄嗟に顔のした後ろを振り向く
其処には、白い服を着た青年がいた

「お前、誰だよ」

「神だよ」

「はあ?」

どうやら俺は相当頭の悪い夢を見ているようだ
だいたい、こんなチンピラみたいな神様がいる訳がない

「誰がチンピラだよ。後、これは夢じゃないぜ」

「お前のことに決まってるだろ」

…………あれ?俺、声に出してたつけ?

「いいや。俺がお前の心を読んだだけだよ。神様にはそれくらい冗
談同然だぜ」

おいおい。マジで神なのかな

「それじゃあ、神様が俺に何の用だよ」

いや、地球でお前が死んだから別の世界に転生をせようとな

は？俺が死んだ？何でだよ！そんな記憶ねえぞ！！

「まあ、殺したの俺だからな。最近はさ、転生できる地球人がなかなか死なないからさ」

「ふざけてんのか！」

「まあまあ。お詫びにお前の好きな”ハンターハンター”の世界だからや」

ふむ……ハンターハンターの世界か。悪くないな

シテ
モ根からしじヤ
モ根でよんがテ
一能ノをく根をハガ

「あ？ あけるわけないだろ？」

「なつ……！」それじゃあどうやつて死亡フラグを回避するんだよ!!

「しなくていい。ついでにその死亡フラグに関する記憶も消しとくからな。頑張れよ」

「こら！待て！！

叫びも虚しく、再び俺の意識は遠ざかっていくのだった

転生してから15年

俺はこの世界で生きていけるようにひたすら己の肉体を鍛えてきた
運良く剣術を代々伝える事を生業としている家に生まれたおかげで
好条件の才能と環境を手に入れていた

さすがに念までは教えてくれなかつたのでそこは我流で鍛えていた

取り敢えず精孔を開いて、四大行をマスターして、水見式で自分の
系統を知るまで1年かかった

水見式の結果では俺の系統は特質系だった

俺としてはウヴォーギンみたいな強化系が良かつたんだがな
まあ、少しでもレアな能力になる事を祈つていた

そんな感じで転生してからの15年を過ぎじて来た

ムカラサヒでも名付けてやるつかな

_____さて、原作への介入を開始するとしてよう

原作介入 そして邂逅へ

さて、俺の試験番号が330番だ
確かゴン達が400番ぐらいだったかな?
だとしたらもう少しこんな場所で待たなければならないという事だ

暇だなあ、なんて思つていると人が近づいて来るのを感じた
そちらの方を向いてみると予想通りの人物がいた
16番の番号プレートを付けた小柄なおっさん
気のよさそうな笑みを浮かべているが、一度でもハンター試験を受
験したことのある奴なら誰でも知つている

—— “新人つぶし” のトンパ

「君、新顔だね。オレはトンパ、よろしく」

そう言つて差し出された手と、取り敢えずは握手を交わしてこちら
からもよろしくと言つておく
そしてトンパは聞きもしないのに自分の知る要注意人物の情報を与
えてきた

ここら辺はまだ原作知識が残っていたからあまり興味が無かつた為、
こうやつて油断させるんだなあなんて考えながら話しを聞き流して
いた

「ところで、のど乾いただろ。ジュース飲まないか?」

「侍の習性でな。人からもらつた飲食物は喉を通らねーんだ」

某忍者さんのセリフを少し貸してもらつた
トンパは侍なんて知らないだろうに納得して退いていった
いや、納得したのではなくビビったのかな
少し真面目にやり過ぎたかな？且とか

これ以上は何も起こらないだろうと思つたところで、予想に反して
まだ声をかけてくる奴がいた
そいつの姿を見て俺はめんぐくになりそうだなと思つた
俺に声をかけてきたのは件の血口主張の激しい忍者ハンゾーだった
「なあなあ、お前もしかしてジャポンの出身か？その格好つて侍だ
よな！奇遇だな、オレもジャポンの出身で忍者をやってるんだよ
。有るもののが欲しくてハンターになりたくてな」

ハンゾーの欲しい物つて「隠者の書」だつたかな？
確か一般庶民には入れない国にあるらしいというやつだ
忍者なんだから盗むのは簡単なはずなのにな

「それじゃあ試験では手は抜かねえがお互いがんばりましょ」

そう言つてハンゾーは消えていった
あいつ、自分だけベラベラと喋るだけ喋つてただけじゃねえか
暇だつたとはいえ貴重な時間を潰されてしまった
もうゴン達が来てるかもしね
探してみようかと思った所で

ジココリココリココリココリココリココリコ
ハンター試験受付け終了の合図がなつた

「では、これよりハンター試験を開始いたします」

「まずいな」

仕方がないので「ゴン達との接触を諦めてできるだけ先頭へ向かう

試験面であるサトツに初めは歩いてついて行っていた受験者達もサトツのスピードに走らざるをえなくなつてくる
全員が走り出し、誰もがおかしいと思った所でサトツが一次試験について説明を始めた

「一次試験会場まで私について来る」と。これが一次試験で「じぞこます」

確か100km近く走らされるんだったかな
取り敢えずサトツのすぐ後ろを走らしてもらおう
いすれゴンとキルアが来るだらつから

その時、第1の目的をはたすとしよう

階段を上り初めて少ししてからゴンとキルアが先頭の俺に追いついてきた

ほとんど疲れている様子がないのは流石かな
そして後ろで試験が簡単だとキルアが言つたところでも俺も話題に混ざるにこした

「まだ子供のくせにたいした余裕だな」

「む、アンタこそオレ達と対して変わらないんじやないの？」

「ああ、俺は15だぜ」

「やつぱり。たつたの4つしか違わないじゃん」

「まあね。取り敢えず自ら紹介しようぜ。俺はムサシツー前だ

「…………オレ、キルア」

「ホーリー・マジック」

「めぐらしへ」

そう言つて俺はゴンの肩に右手を置き言葉を畳みへり

「チェック志番」

すると、俺の右手の親指の爪に漢数字の壱が刻まれる
他の爪にも弐から伍までの漢数字が刻まれていた

「何かした？」

「うん? 何もしないぜ。それより出口だ

勘のよさで気づかれたが分かつてないから良いだろう
キルアもこっちをジッと見ていたので慌てて話しを逸らす

次はあの湿原
ヒソカが少し暴れるな

少し、遊んでみようかな

一触即発 そして殺戮へ

やっと地下を抜けて一次試験が終了した……と思つたら
今度は果ての見えない上に危険な動物がたくさんのヌメーレ湿原、
通称”詐欺師の壇”を通つて行かないといけない
俺は知つていたけど知らなかつたら心が折れちゃいそつだな

そして早速、この湿原が危険性を猿さんがデモンストレーションし
てヒソカに殺されてくれたおかげで受験者全員が改めてヒソカの恐
ろしさを再確認することができた
こんな湿原よりもヒソカの方が何十倍怖いよな

そうして俺達は再び走り始めた
さつきまでの地下道とは違つて地面がぬかるんでいるし霧まで出て
くるからかなり難易度が上がつてている
それでも先頭のゴン達と一緒に行けない訳でもないが、敢えて俺は
レオリオとクラピカの辺りを走つていた

何故かというとヒソカと闘うためだ
確かにアイツは恐ろしい快楽殺人鬼だが、この先を生きていくため
には実戦的経験が必要だ
残念ながらこのハンター試験でちゃんと経験値になりそうなのはア
イツとハンゾーくらいだからな

念さえ使わなければ成長の余地があると見て、ijiで殺そうとはしないはず……たぶん

そして一段と霧が濃くなりだして周りの人間が湿原の生物に襲われてパニックになりだした時

ヒソカが動いた

いくつものトランプが受験者に飛来する
もちろん、只のトランプではない

オーラを物体に纏わせる”周”が使われている為、それだけで周りの受験者は死んでいく

しかもその理由が、タルイから選考作業を手伝つてあげよう、ときた
それに我慢出来なくなつた受験者がヒソカを取り囲むも、敢え無くトランプ1枚で殺された

残つたのは俺、レオリオ、クラピカの3人

「残りは君達3人だけ？」

そう言ってヒソカはゆっくりと俺達に近づいて来る
アイツが近づく毎に空気が無くなつていてる様に感じるぐらい濃密な
殺氣が発せられている

「やられっぱなしでガマンできるほど……『イ長くねーんだよ…』

「レオリオ！？」

レオリオが叫びながらヒソカに殴りかかるも、あっさりと避けられて背後を取られる

そこへ、ゴンの釣り竿がヒソカの顔面に掛け飛んできてクリーンヒットする

だがヒソカは何ともないかの様にゴンの方を振り向く

「やるねボウヤ？釣り竿？おもしろい武器だね？」

「てめエの相手はオレだ！！」

レオリオを無視してゴンに向かおうとしたヒソカを襲うレオリオを制するように俺が前に出てヒソカに斬りかかる

「おつと危ない？」

それは避けられるが、ヒソカが離れた隙に俺はゴン達に集まるように指示する

「ゴン達は先に行つていってくれ。俺がヒソカを足止めする」

「ムサシ、でもヒソカは！！」

「分かつていてる。俺は大丈夫だから、後の2人も先に行つてくれ」

「……分かつた。感謝する、ムサシとやら」

「クラピカ！？」

「行くぞ、ゴン、レオリオ」

そしてゴン達3人はこの場を離れて行った
ゴンならレオリオの香水のニオイがなくても人間が密集している一
オイぐらいい嗅ぎ当てるだろう
ゴン達が去るまで待つていてくれたヒソカに声をかける

「待つていてくれてありがとう」

「うん？彼らは合格だしね？」

そう言つてヒソカはトランプを構えて俺1人にだけ殺氣を向けてくる

「さあ、始めようか？」

挨拶代わりのトランプが俺を田掛けて飛んでくる
それを刀で弾かず、敢えて前に突っ込み紙一重で避けてヒソカとの
距離をつめる

「わお？ 素晴らしいね？」

ヒソカは高速で近づく俺を止めようとせず、待ち構えていた

「はあつ……」

間合いに入った瞬間、刀を抜きヒソカの首を狙つて振るうもトランプでガードされる
すぐに刀を戻し、再びヒソカに振るい、防がれる

これが僅か数秒の間に何十回と繰り返される
俺が念を使わないからか、ヒソカも使っているのはトランプへの周だけで肉体を強化する”堅”すらに使つてはいない様だつた

お互に念を使わない状態ならば俺の方に分があるらしく、だんだんヒソカの防御がギリギリになつて来た
内心、もしかしたらいけるかもしぬないと思った俺はヒソカの顔を見て硬直してしまつ

——笑つてやがる

「隙だらけだよ?」

「くつ……」

ヒソカの邪悪な笑みに動きを止めてしまった俺をヒソカが見逃すはずがなく、トランプで斬りつけてくる
固まっていた俺はよけが遅れてしまい頬を浅く斬られる
ヒソカの高度な周を施されたトランプの切れ味をこの身で味わうことになつた

「まらほら?どんじんいくよ?」

先程までと立場が逆転して俺が完全に防御へまわっていた
ヒソカのスピードが上がっている訳ではない

ヒソカの笑みが頭から離れない、俺の動きのキレが落ちているのだ
どうやら俺は本当の”死合い”とやらをなめていたようだ
分かつてはいたが、自分の弱さを痛感させられる闘いとなってしま
つた

「はい、お終い？」

やはり、俺は負けた

決め手は右肩を斬られて刀を落としてしまったことだ

「くく？ 落ち込む必要はないよ？ 純粹な身体能力だけならキミの

方が上だよ？まあ、経験の足りないボウヤだけどね？」

そつ言つてヒソカは携帯で誰かと（恐らくイルミだろひ）話しだした

「OKすぐ行く？」

携帯を仕舞つとヒソカは俺に近づいて来る

「じゃ、一緒に行こうか？」

「…………いいのか？」

「うん～キリをこいで脱落せせるより先に進ました方が美味しい育ちやうだ？」

「…………分かった。ありがとう」

俺は傷の応急処置を済ましてヒソカの横に並び、二次試験会場へと向かつた

一触即発 そして殺戮へ（後書き）

ムサシは念なしなら「」の世界でもトップクラスの設定です

試験失格 そして復活へ

襲いかかってくる動物からヒソカに守られながら一次試験会場へと歩みを進めていた

意外と右肩の傷が深かつた為、右手で刀を振るうことができないの
で障害の対処は全てヒソカに任せていた

左手を使えばいいのだがあまり手の内を見せたくないからね

「……それにしてもさ。成長するかもしれないってだけでここまで
助けてくれるの？」

これは疑問に思っていたことだ

原作では「（）」ここまで直接手を貸したりしなかった

「気になるかい？何故かといふと、キミからはボクと同じ一オイが
するからさ？」

—— 有り得ない

「…………自慢じゃないけど俺は人を殺したこと無いよ

そうだ。まだ俺に人を殺す事ができた試しあい、”俺”には

「だろうね？だけどボクには分かるよ？キミの中にはステキなもの
が眠つているってね？」

だから、

「それを起にしてあげなきや？」

…………本当に見抜かれているみたいだ

キルア相手には誤魔化すことができたが、ヒソカには隠し通すのは無理だったか

まあいいさ。この試験で”アイツ”の出番はない

そつして俺達は湿原を抜けて二次試験会場へと到着した

「へへへへ？じゃあね？」

そつ言つてヒソカは俺から離れて人混みへと向かつていつた
…………お礼を言い損ねちまつたな

そして取りあえずゴン達を探そつとした時、建物の扉が開き巨大な
男と女が姿を現した

「さあ、二次試験は料理よ！」

女の方……美食ハンターのメンチが宣言した

ルールを詳しく説明すると、2人が指定する料理を作り「おいしい」と言わせれば良いらしい

そして、大柄の美食ハンター・ブハラの指定したメニューは豚の丸焼
きだつた

そうして二次試験がスタートし、受験者は一斉に森へと豚を探しに行つた

そしてたいした時間もかからず前半戦は終了した
半分近くが落ちてしまつたが、それでも例年に比べるとかなり優秀な方らしい

しかし、ここからが本当の地獄だつて事をコイツらは分かつていな
いんだよな

「二次試験後半、あたしのメニューはスシよーー！」

受験者のほぼ全員がスシが分からず困惑していた
一応ヒントとして料理するための道具やゴハンを用意していくとは
いえかなりの難題だよな

「それじゃ、スタートよー！」

結果から言つとこの試験を合格できる者はいない

ハンゾーのせいで作り方がバレるはメンチを怒らせるはで試験の審
査規定が狂つてしまふのだ

もちろん、それを知つても生まれてこの方料理などしなことの
ない俺にメンチを満足させるだけのスシが作れるはずがない

よつて、原作通りネテロが来て新しい審査を提案するまで少し休ま
せてもらおう

ヒソカとの戦いは予想以上に精神的に疲れたからな

……………そりゃあゴン達に姿を見せてないけど。大丈夫かな？

そして、賞金首ハンター志望のトードーさんが田舎を舞つた辺りでやつとネロ会長が参上した
しかし空から降つて来るってのは思つたよりもインパクトのある登場の仕方だな

ネロ会長がメンチを諭したことでの新たな審査として今度はゆで卵がメニューとなつた

そして俺達はメンチの指定した山へと向かうため飛行船に乗り込んだ

そして行われた再二次試験をクリアして俺は無事に三次試験へとコマを進めた

蒼空旅行 そして玉盜へ

二次試験をクリアした俺達は三次試験会場へと協会の飛行船で向かっていた。

ネテ口会長から残った受験者42名に改めて自己紹介が行われている。

本当は俺を含めて43名の合格者がいるはずだったが、二次試験である人物に退場してもらつた。

——トンパのことだ。

彼には悪いが峰打ちで一次試験中氣絶させておいたので失格となつていた。

まあ三次試験での奴の代わりは俺に任せてもらおう。
さて、自由時間にもなつたしゴン達に俺の無事を知らせておこうかな。

すぐに探さなかつたのが悪かつたのか。

見つかったのはクラピカとレオリオだけで既にゴンはキルアと探検に出かけた後だつた。

……心配されてないかなあー、つてのは自惚れだつたかな。一応あの2人にも声かけとこつか。

「よお、403番に404番」

「君は…………ムサシ！無事だつたのかー…？」

「えつー…ヒソカと一緒に残つた奴か！生きてたのかよ…！」

「まあ、『J覧の有様だけどね』

そう言つて俺は治りきつていない右肩を見せた。

「……本当にすまない。私たちのために……」

「いや、気にしなくていいよ。それじゃあ俺は『J』を探していくか

ら、またね！」

2人と別れて俺は再びゴン探しを開始した。

ゴンを探して走り回っていた俺は、突如前方から殺氣が溢れてくるのを感じた。

最初はヒソカがまたやつちゃったかと思つたけど、冷静になつて思い返してみると心当たりのある出来事を思い出した。

ええいままよと殺氣の方に近づくと、やはりソロモンはキルアと袁れな死体が2つあつた。

ネテロとのやり取りで感情が高ぶっているからか俺に気づいてないかのように近づいて来て、俺にまで肉体操作で変化している右手を心臓田掛けて突いてきた。

流石に殺されたくはないので、とんでもない速さの右手を掴み取る。

「おーおー、危ないだろ」

「……………あれ？ 確かアンタ…………」

「ムサシだよ。もう忘れちまつたのか？ キルア」

「ああ……。へえー、あの状態のオレの攻撃を止めるなんてやるじやん。」

「何がやるじやんだ。お前といいヒソカといい、少しだけ重じるよ
「悪い悪い。もう落ち着いたから。じゃあな」

「おひー…………って死体ちゃんと処理してけよー」

俺の叫びも空しく聞こえない振りをされて逃げられた。

「まつたく…………俺も知ーらねー」

誰かに見つかる前に急いでこの場を離れたことにした。

「おー、やつと見つけたぜ」

探し始めてから少し時間がかかったがなんとかネテロとボール盗りの真っ最中のゴンを見つけることができた。
まあしかし、ゴンは良いように弄ばれている。
ネテロも存外大人気ないよね。

……少し俺もイタズラしたくなつてきたな。

能力が1つバレるかもしれないがネテロにバレても大したリスクにはならないだろう。
むしろ、ネテロが俺の能力を過大評価してくれればこの先有利になりそうな予感がする。

といつ訳で、まずネテ口達に近づき俺の存在を気づかせる。その後、この場を離れる振りをしてゴン達を田視できるギリギリの距離をとる。

そしてゴンがネテ口に頭突きをかまそつと飛び込みネテ口がよけようとした瞬間、俺の能力『追爪する五つの印』^{ストーキングマニキコア}を発動。

「ジャンプ、壱番」

言葉を唱えると、俺の身体は一瞬でゴンの元へ跳ぶ。この場を離れたはずの俺が突然現れることに驚く隙すら^{アラカルト}にネテ口からボールを奪い取る。ゴンは壁にぶつかった拍子で氣を失ってしまったようだな。

「乱入しちゃってすいません。ネテ口会長」

「おぬし……今のは能力かの? まったく姿が見えなかつたぞよ」

「ええ、その通りですよ。なかなか凄い能力でしそう?」

「ふむ……強化系の超高速移動、または条件付きの瞬間移動といったところかのオ」

今だけここで分かるのは流石かな?
ほとんど正解のよつなものだしね。

「わあどうでしょ? 取りあえずゴンはもうつていきまかよ」

「つむ、友達かの？田が覚めたらワシも楽しかつたぞと教えてくれんかの？」

「OKですよ。それじゃあおやすみなさい」

「コンを抱えてどこか安全に眠れる場所を探すことになった。

「ふむ……あやつめ、相当な手練れじゃのォ。このワシですら底か測れないほどの絶じやつた。あの若者であれなりば将来が楽しみだぞよ。ほりまつほりまつ」

蒼空旅行 そして玉盜へ（後書き）

主人公設定に新しい能力について更新しておきます

三次試験 そして孤島へ

心身ともに多大な疲労を負つた激闘の1日の翌朝。

飛行船で一夜を過ごしたことで受験者達の表情にはある程度の活気が戻っていた。

だがそれ以上にこれから試験への不安に顔を曇らせている人数の方が多いうだ。

何故かというと今、俺達は飛行船から雲をも突き抜けている塔のテッペンに降ろされたからだ。

そして目の前の人間どうかが怪しい丸顔から三次試験の説明がされる。

「ハハ、トリックタワーと呼ばれる塔のテッペンが三次試験のスタート地点になります。試験内容は、72時間以内にこの塔を生きて下まで降りることです」

説明だけすると、丸顔は飛行船に乗つて帰つていった。

残された受験者達は入り口の見当たらぬこの塔をどうやって降りていくか悩んでいた。

側面の壁をロツククライミングの要領で降りようとした受験者がいたが、野鳥のエサとなつた。

そして、どこかに下へ続く隠し扉があると結論づけて全員が探し始めた。

俺はどうしたかといふと、ゴン達が使つた隠し扉の周辺を探つているのだが中々見つからない。

30分ぐらい時間をかけてやっと見つけた。

だが、ここが本当に「ゴン達の落ちた部屋につながっているとは限らないからなー。」

能力を使えば確実だけど説明が面倒くさいので、取りあえずは自分の運にかけることとした。

高さもないのキレイに着地をする。

「あー、ムサシだー！」

「おおー、もっと待つのかと思つたけどラッキーだぜ！」

「あれ？「ゴン達つてもっと先に降りてなかつたか？」

「それに関しては私から説明しよう！」

クラピカから”多数決の道”についての説明を聞いて腕にタイマーをはめると、壁の一部に扉が現れた。

「なるほど。5人そろつてタイマーをはめるとドアが出現する仕組みか」

「それじゃ、早く進もうぜ」

途中で カ×の質問を受けながら、順調に進んでいく。

「そういえば、まだ名前を教えてなかつたな。私の名はクラピカだ」

「オレはレオリオだ。ムサシつつたか、変わつた服におかしな剣だがどこの出身なんだ？」

「あー、そういえばカイトも似ている剣を持つてた！…」

「俺はジャポンつー小さな島国の出だよ。それに、これは日本刀つていうやつだ。切れ味はとんでもないぜ」

他愛のない話を続けると、道が途切れている空間に出た。

「見ろよ」

キルアの言う通りに向かい側を見ると、フードを被り手錠をつけた5人の人間がいた。

その内の1人がフードと手錠をとり、こちらに向けて叫びだした。

「我々は審査委員会に雇われた”試練官”である。お前達は我々5人と一対一で戦い、3勝しなければ先に進めない。ちなみに戦い方は自由だ…」こちらの一番手はオレだ、そちらも選ばれよ…」

「……」まじめなのがベストか……

「どうするよ？」

「戦い方は自由といつことは何でもアリだといつことだ。慎重にいくべきだろ？」

「なら、俺がいくよ」

「まあ……ムサシなら問題ないかもね。相当強いみたいだし」

他の3人もキルア同様に賛成してくれた。
細っこい石橋を渡つて中央のステージへ向かつ。
そして試練官と正面から向かい合ひ。

「さて、オレは勝負方法に『スマッチ』を提案する。負けを認めるか死ぬまで戦う！」

「いいよ。早く始めようか」

「その若さで見事な覚悟だ。それでは…………勝負……」

試練官が低い姿勢で突っ込んでくる。

さて、どう対処するか。

殺すのが一番楽だがまだ俺は殺すことへの怖さを克服仕切つてはない。

気絶では原作みたいに時間を稼がれるかもしれない。

どうにかして戦意を喪失させなければならぬんだよなあ。

何て事を考へてゐる内に試練官を俺の目前に迫つていた。
試練官の両腕が俺を掴もつと振るわれる。

しかし、俺の身体は一瞬で試練官の面前から消え去り、逆に背後を
とり刀を首筋に突きつけていた。

全てが無意識の内の行動だ。

一生懸命に対処方法を考えていた時間を返して欲しい。

「……降参する?」

「くつ……まいつた」

あつさりと降参してくれたことに心中でガツッポーズ。
もし「」で粘られたら、少し物騒な手段をとることになつていたか
らな。

「まずは1勝だな。次は誰がいく?」

「オレが行くよー。」

「よし、それじゃあ任したぜ『ゴン』。」

ゴンの対戦相手は見るからに戦闘派ではなく、実際に提案してきた
ルールも”同時にローソクに火をつけて先に火が消えた方の負け”

「どうものだった。

「では、どちらのローソクがいいか ×で決めてくれ」

試練官の手には長いローソクと普通のローソクの2つが握られていた。

「長い方にはきっと仕掛けがあるに違いねーぜ！」

「いや、その裏をかいて短い方に仕掛けがあるかも」

まあ、本当はどうやらも罷なんだけれどね。

それで結局ゴンの野生のカンにかけることになった。

カン……っていうか罠とかを何も考えてないだけだがな。

そして後は原作通り。

ゴンのローソクは火の勢いが強くてあつという間に燃え尽きそうになつたが、相手のローソクに直接息を吹きかけてゲームはゴンが勝つた。

「よし、これあと1勝だぜ！」

「そうだね。じゃ、任せたよキルア」

「はあー？」はクラピカだろーー！」

レオリオはキルアのことほとんど知らないからなあ。

そう思うのも仕方ないけど、正直あのイベントに付き合つのは手間なんだよね。

それにキルアも少しカチンと来てるみたいだし。

「いいじやないかレオリオ。彼もここまで勝ち残ってきた実力者なんだ」

「むう……任せたぞ、キルア」

「うん。瞬殺していく」

宣言通りキルアが見かけ倒し野郎を瞬殺して俺達は再び先に進み始めた。

そして、いくつもの多数決をこなしていく、とうとう”最後の別れ道”へと辿り着いた。

課題は2人でスタート地点に戻る の道か、3人ですぐにゴールできる×の道を選ぶかというものだった。

「……そして、先に言つておくれが俺は——」

「あー……」めん、レオリオ。少し離れといへ

「おー、何をする気だ?」

「いいから、いいから」

そつとみんなを後ろに下がらせて俺1人が扉の前に立つ。
そして一息に鞘から刃を走らせ、扉を斬り裂いた。
後ろでみんなが唖然としているのが見なくても伝わる。

「おーおー、日本刀ってのはこんなにすげえのか?」

「もうのうた。言つただろ?切れ味はどんでもないって」

オーラで少し強化していたのはナイショだ。

「それじゃ、行こうよ。」

コンに続いて、俺達は出口を手口指して行った。

な……ん……だと?

「諸君、タワー脱出おめでとう。四次試験はゼビル島で行われる。では早速、クジを引いてもらひ。これで、狩る者と狩られる者を決定させてもうひ」

引いたカードの番号の受験者のナンバープレートが高ポイントになるんだつたよな。
さて、俺のターゲットは誰だらつか。

狩獵終了 そして最終へ

俺達は今、四次試験の舞台であるゼビル島へと向かう船に乗っている。

ちなみに受験者の空気は最悪だ。

誰が自分を狩る者なのか？って疑問から疑心暗鬼に陥っているからだね。

ん？俺はどうなのかつて？

それはもう、絶賛大後悔中ですよ。

ヒソカがターゲットになるくらいならトンパン残らしつけば良かつた……。

てゆーかこのままだと俺がヒソカと原作みたいに”一発ぶち込むまでプレートは預ける”をやらなければならなくなる。
そんなのは絶対にゴメンなので開き直つてプレートを3枚集めることにしよう。

?

?

?

?

そして、船がゼビル島に到着した。

船を降りるのは三次試験を早くクリアした順番になので、俺の番までは少し時間があった。

その時間を利用して、俺は情報を集めていた。

手に入れた情報は3つ。

1つ目はクラピカのターゲットは384番。

2つ目はゴンのターゲットは191番。

3つ目はレオリオとキルアは原作通り。

割と信用を得ていたのかあっさりと教えてくれた。

これだけの情報が集まれば、なんとか筋書きを作り上げることができそうだ。

やつてやる…………やつてやる。

俺は周りに他の人がいないことを確認すると、鞘にオーラを溜めて

1人は試験官、もう1人はおそらく俺のプレートがターゲットの受
験者だろう。

俺が島に上陸して1時間が経過した。
適当に歩き回ってみたが受験者とは遭遇しなかった。
しかし、俺を追けていた奴が2人いる。

？
？
？
？

いや、刀を抜くのと同時にオーラを斬撃として背後へ飛ばした。

『剣の風（ブレイドソニック）』

放出系の技なので特質系統の俺が使つても大した威力は出ないが、その分スピードを出すことに力を加えたためその速さは音速に匹敵する（かもしけない）だろう。

放たれた斬撃は低威力でも木々をスパッと斬り裂いていく。途中で人間の肉を斬る音がしたのでその場所へ向かうと384番のプレートをつけた受験者が右腕を押された状態でいた。

「ぐう……ちくしょく、気づいてたのか」

「まあね。プレートをくれるなら命まではどうないよ」

「ちっ……俺の負けだな。やるよ、プレート」

よし、まずは一つ。

とはいってこのプレートはクラピカのターゲットだからな。交渉材料といったところだらう。

「じゃあな。早く止血とかしろよ」

約束通り384番は殺さないであげる。

原作じやあヒソカに殺されているのだから右腕一本で済んでラッキーダよな。

?

?

?

?

「むう……遅いなあ~」

俺はあれから次の予定のために一~~旦~~スタート地点に戻っていた。
日が暮れたらここで落ち合ひのようにあらかじめゴン達と決めておいた。

キルアには声かけなかつたけどマイツは放つておいても楽にクリアするだろ?しね。

30分ほど待つと、まずクラピカとレオリオがやって来た。
どうやら組んで行動していたらしい。

「すまない。待たせてしまったな」

「大丈夫だよ。そんなに待つてない」

「ゴンはまだ来てねーのか?」

「ああ……まだ来てないぜ」

ちゅうどその時だった。

森からボロボロになつたゴンが出てきた。

「いめん。遅くなつちゃつた」

「おいおい、一体何があつたんだ!?!?」

「うん……オレのターゲットの人、お爺さんだつたけどスゴく強く
て……」

「なつ……負けたのが?」

「いめん、ギリギリだつたけど勝つたよー。」

よし……これでゴンはクリアが確定だな。

「やつだクラピカ、これやるよ」

「分かつた。私はこの集めた2つのプレートでいいか？」

「OK！」これでゴンとクラピカはクリア、俺もあと一枚だな」

予想以上に順調だな。

「後はムサシとレオリオだけだな。レオリオのターゲットのポンズについて何か知っていることはないか？」

「俺が知る限り、ポンズは薬を使いワナをはるタイプだ。ゴンの嗅覚なら難なく見つけられる」

「本当か…よし、行くぜゴン…！」

再び森へと入つて行くレオリオ達を見送る。さて、ここまで来ればあとは適当な奴からプレートを奪うだけだからな。単独行動に移るとしようか。

?
?
?
?

突如、後頭部に何かが激突したのを感じる。

だがしかし、神は俺を見捨てていなかつた。

なんて事を自分の円が最大10mだということを忘れて考えているあたり、精神的にもヤバいかもしない。

円を使えば楽勝だが、もしヒソカに触れてしまつたら取り返しがつかなくなる。

単独行動を始めて3日が経つた。
俺は円を使いたい衝動を必死になつて抑えていた。

「……痛エ。誰だか知らねーがイイ度胸だああああーーー！」

と、ぶつかった物を握りしめながら叫ぶ。

そして感じる違和感。

手の中のモノが丸い形をしていることに気づく。

「お……おお？」

そこに握られているのは197番のプレート。キルアが受験者から奪い、適当に投げたプレートだとこいつはと思いつる。

「…………神様仏様キルア様」

このおかげで、ムサシも無事に四次試験をクリアした。

試験合格 そして救出へ

現在俺達は迎えに来た飛行船に再び乗り込んで最終試験の会場へ向かっているらしい。

受験者は各自が最終試験に向けて鋭意を養っているだらう。なにせ次の試験の合否で今までの苦労が無に帰することになるかもしないしな。

緊張も今までの試験の比じゃない。

そんな中、俺はまたもや後悔の嵐の渦中にいた。

なぜかと云ふと、ゴンのターゲットが原作で最終試験に残っていたポドロさんだったことをウツカリ忘れていた。

ポドロさんといえばキルアに殺される哀れな脇役。つまり、代わりに俺が殺されてしまつ可能性が無いこともないのではないか？

いや、俺もそんなことはない！と思いたいけどね。何が起こるかなんて分かるわけないからね。

取りあえず今の内にキルアの好感度を上げておかねば

『次は受験番号330番の方おこしتوセ』

—— しまつた、面談のことを持っていた。
さすがにコレをすっぽかす訳にはいかない。
くつ、結局また俺の運次第ということか！

..... キルアが少しでも俺のことを友達だと思つていればいいけど。

？
？
？
？

結果的には、俺は殺されずに試験を合格したらしい。

らしい、と言つのは俺に最終試験の記憶は無いからだ。
気付いたら既に合格者の講習会が終わろうとする所だった。
覚えているのは「ゴンがハンゾーになぶられている途中まで。

あー……確か”僕”に代わつてもらつていたんだつたな。
あのままゴンへの仕打ちを見ていたらキレちゃつて”オレ”が出て
くるかもしぬなかつたからな。

実を言うと、俺は多重人格者だ。

”俺”の他にも3つの人格を頭の中に飼つている。

これは天然ではなく、俺の念能力で造り上げたものだ。

この能力——『鬼怒私落』——で造つた人格は条件付きで知識
の共有はできても記憶を共有することはできない。

故に、”俺”……「私」の人格以外はゴンのことを赤の他人としか
思わないのだ。

だから最終試験の内容のほとんどを俺は覚えてないのだ。
だが、知識の共有はできるため、内容を知るうと思えば知ることは
できる。

他人の記憶を文字だけの日記で見てるような感じと言えば分かりや

すいだろうか。

ただし、ムサシの元々の人格をベースに造られた「私」の人格……つまり、”俺”のみが可能なことではあるが……。

今、”僕”：「落」の人格から手に入れた知識によると、不合格はやはりキルアだった。

誰も殺さないで試験途中に姿を消したらしい。

「ここにいる8名を新しくハンターとして認定いたします!」

ちょうど知識の読み取りを終えると同時に講習会も終了したようだ。そしてゴンが、ギラクタル（イルミ）にキルアの居場所を聞き出している。

もちろん、俺もゴン達の側へと向かう。

「あれ？ キミもそつなの？」

「当たり前だ」

イルミの質問に対しても毅然と言い返す。

ゴンは嬉しそうに、クラピカとレオリオは意外そうに見てくる。

……まあ、僕の態度はキルアを見捨てたように見えたかもしれないからな。

「……いいだろ？ キルは自宅に戻っているはずだ。ククルーマウントンの頂上にオレ達一族の棲み家がある」

？
？
？
？

キルアを救うため、ククルーマウンテンのあるパドキア共和国へと俺達は赴いた。

聞き込みによるとゾルディック家の観光バスとやらがあるらしいの

でそれに乗りククルーマウンテンを目指す。

ガイドの人気が家族構成まで教えてくれるけど何で知っているんだろう?
隠していないだけじゃ説明つかないよな。

そうしてゾルディック家の正門”試しの門”に着いた。

「ねエガイドさん。どうやつて中に入るの?」

「あのねボウヤ。ここは殺し屋の隠れ家、中に入ると2度と生きて出られないの」

「ハン!ハッタリだろ?」

ガイドの言葉にかませなオッサンが反論する。

「誰も見たことのない伝説の暗殺一族。ウワサだけが一人歩きして
るだけで実際は大したことがねエッてのがオチよ」

偉そうなことを言つてオッサン達は守衛から鍵を奪い門の横の方に
ある小さな扉から入つて行く。

コイツらも頭悪いよなー、と思いつながらもちゃっかり俺も一緒に入
る。

「え?.....ムサシ!?」

「おっ先イ——」

驚くゴンに手を振りながら、俺の姿は扉の中へと消えた。

オレは投げ捨てられて尻餅をついている守衛さんに駆け寄る。

「大丈夫？」

「ああ、大丈夫だよ。あーあまたミケがエサ以外の肉を食べちゃうよ」

「え？」

ミケ？ エサ？ 一体なんのことだろ？

そう思つた時、さつき閉じたばかりの扉が開き始めた。

もう帰つてきたのかなと思つていたら、出てきたのは巨大な獣の手と2つの骨だけになつた死体だった。

一瞬、ムサシなのかと思つたけど服を見て違うことが分かりホッとする。

「あれ？ 1つ足りないな。ミケは骨までは喰わないはずなんだけどなあ」

「当然だよ、おじさん。ムサシはとても強いから」

でも、勝手に私有地に入るのは良くないからね。
オレ達はまず、守衛さんに話しを聞いてもらおう。

?
?
?
?

うーわ、あのオッサン達一瞬で喰われちまつた。
かくいう俺もミケちゃんから逃亡中なわけだけね。

迂闊だつたなあー。
絶でやり過ぎすつもりだつたんだけどな。

絶を使つても一オイで追いかかれている、ココヤ。

こんなことならキルアにもマーキングしておけば良かつた。
いや、アイツにそんなスキはないか。

さて、後悔ばかりしてこじて仕方ない。
そろそろミケちゃんとのおじぎも終いに近づく。

試験合格 そして救出へ（後書き）

オリ主の最後の能力を公開しました
我ながら扱い難い能力にしてしまったなあ
記憶のところに関しては「空の境界」の玄霧さんみたいな感じです
設定の方も更新しておきます

隠家侵入 そして空戦へ

はじめまして、僕の名前はムサシです。

”俺”と名前が被るというお方はムサシと呼んで下さい。

ちなみに「はい〇〇」の〇〇です。

戯れ言はさておき、どうして僕が表に出でるかについて説明しておこうと思います。

”俺”に与えられた知識によると、ミケちゃんという番犬（？）を発でノックアウトさせた後、次々とゾルティック家の執事らしい黒服の人達が現れて襲いかかってきました。

僕は無能な他人格達と違つて円を最大50mまで広げることができ
ます。

”俺”と代わり、円を使って襲い来るソルティック家執事達から逃げていました。

けれど、それが通用したのも最初の内だけでした。

「いくら田を広げる」ことができても全方位から来られては避けようがありません。

故に、僕は作戦を変更することにしました。

僕のもう一つの特性に操作・具現化能力の上昇があります。

”俺”では具現化した剣を相手に飛ばす程度の操作が限界ですが僕ならこんな風に、飛ばした剣に乗り空を飛行することもできます。

それでも時々下から放出系能力者や操作系能力者の攻撃が飛んで来るのでですが、自動的に盾が具現化されて攻撃を防ぎます。

この盾は、一つしか具現化できないという『制約と誓約』のおかげで相当な堅さですから、”あの娘”的『対空砲花』クラスの攻撃でもない限り僕に攻撃が届くことはありません。

おや……？

前方から何か飛んできますね。

あれは……光の龍？

?

?

?

?

ククルーマウンテンにあるゾルティック家の隠れ家より遙か彼方を見つめる1人の老人の姿があった。

キルアの祖父、ゼノ＝ゾルティックであった。

「ふむ、殺つちまつたかのオ。一応キルの友達らしいから手加減し
たんじやが」

先ほどムサシの見た光の龍の正体は、ゼノがオーラを変化させて
作った『龍頭戯画』という念能力だった。

変化系能力にも関わらず、ゼノの手を離れても威力が損なわれない
辺りにゼノの実力が現れていると言えるだろう。

「ほお、どうやら防いだようじやな。若いクセに中々やるようじや
のオ。どれ、もう少し遊んでやろうつかの」

ゼノは、再びその手にオーラを集中させた。

空中に古今東西を問わぬ多種多様な剣を具現化せます。

1体でも僕の盾では防ぐことはできません。
防御がダメなら攻撃しかありませんね。

おっと、思考する間もなく2撃目ですか。
しかも今度は3体同時。

さすがはゾルディック家。

相當な念能力の使い手がいるようですね。

これほどの威力にオーラ自体を飛ばしていることから具現化系の可能性は低いはず……放出系か強化系でしょうか？

まさか僕の盾を突き破つて来ますとは……。

「危なかつた……ですね」

その数、108本。

「射きなさい」

僕の命令を受けた剣群が彼方の敵を目標に疾走します。
途中でいくつか龍と相殺されるが、こちらの方が圧倒的に量で勝つ
ていますからね。

「さて……どうします?」

敵がどうやって僕の剣群を防ぐのか、楽しみですね。

「…………コレほどとはのオ。キルの友達を侮つとつたわい。ワシも
ちことばっかし本氣でいこつかの」

今まで以上のオーラを両手に込めて、一気に放つ。

現れたのは1匹の龍。

されど、剣群との距離が100mを切った途端、龍は剣群を上回る数に分裂し、小龍となつて剣群を迎撃した。

剣群を蹴散らした龍は、次の獲物を求めるかのようにムサシに向けて一直線に飛来した。

「コレ……は……」

なんという規格外。

放出した龍をあそこまで操るとは……放出系能力者でありながら操作系まで極めているというのですか！？

「くつ……仕方ないですね……」

僕の乗つている剣を唯一の逃げ場である真下……森へと進路方向を無理矢理変更させます。

急降下で森へ入り、森の中を縫うように飛び回ります。

「ふう…………さすがに森の中までは追つて来ませんか。自動追尾ではないよ」

「龍が追つて来ないことを確認してひと息つきます。
もちろん執事対策に絶も欠かしません。

「…………一度”俺”と代わりましょう。彼なら何か敵の情報を持つて
いるかもしれないですからね」

「ひつて最強の殺し屋との戦いは逃亡と云つ結果に終わった。

隠家侵入 そして空戦へ（後書き）

ゼノの本当の系統は変化系ですけど
ムサシには原作知識が与えられてないので色々と勘違いしています
初見だつたら放出系能力者だと思いますよね

円が苦手とか具現化の数が少ないという弱点をアッサリ無くしちゃ
ってスミマセン

一応、クラピカの絶対時間みたいな限定的なもので

ちなみに剣に乗つて飛行はシユートさんみたいな感じです

伏線ぼく出したあの娘は次章で出します

再開誓い そして離別へ（前書き）

すみません、「都合主義になってしまいます。

再開誓い そして離別へ

数日が経つてようやく俺はククルーマウンテンの麓までやって来る
ことができた。

「追っ手は…………いなーな

執事達はさうにか撒くことができたみたいだ。

それにも、ゼノと闘りあうことになるとはな。
まあ、本気で殺りにきたわけではないだらう。
でなければ生き残れたのは奇跡だ。

「取りあえず、入り口を探すか」

いつ追っ手が復活するか分からぬからな。

?

?

?

?

あれから1日中入り口を探し続けて、ようやくそれらしき場所を見つけることができた。

隠れ家の入り口だから眼を警戒したのだが特にそういうモノは仕掛けられていないらしい。

ただ四角にくり抜かれた古の道を進んで行く。
取りあえずはキルアと合つために独房を手招そひ。

この国に来てまだ1週間ぐらいしか経っていないからキルアは拷問紛いを受けているはずだし。
聴覚を強化してムチの音のする方へ進んでいれば、いずれキルアの元へたどり着けるだろ？。

そして、次の別れ道を右に曲がろうとした時だった。

突如に強大なオーラの持ち主を察知する。

「これは…………円！！」

「ちつ！ 不味いな」

いくら絶でオーラを閉じていても俺自身の存在は隠せない。つまり円に触れた時点で俺の居場所はバレてしまった。

「くう…………！」

すぐにこの場を全力で離脱しようと見え、すぐに諦めた。

先ほどのオーラの持ち主が既に俺の目の前に来ていた。

「よつこや、ゾルディック家へ。じゃが依頼なりひやんと守衛を通してくれんとのオ」

ゼノ＝ゾルディック…………。

腰を低くし、右手を刀の柄に添えていつでも抜くことのできるようにして臨戦態勢をとる。

田の前の人間は、決して油断ならない怪物だ。

「お主の絶は見事なもんじゃわい。田で触れても、こいつで田前に来ても全く力量が計れん。じやから闘り合つてこひなう、悪いが手を抜くことはできんぞ」

「…………」

どうする？

とてもじゃないが殺し屋のホームで殺り合つて”今の”俺に勝ち田はまず無い。

「ヤー、通してもらつても構わないかな？」

「ふむ、理由を聞かせてもらおつか」

「友達に、なりたい奴が居るんだよ」

俺は、正直に話すことを選んだ。

「ふむ、殺し屋の子供と友達になりたいとは変わった奴じゃの。良
かろつ、進め」

……おや？ 上手くいったみたいだな。

「ありがとさん」

キチンとお礼を言つて横を通り過ぎて行く。
ゼノがボソッと何か言つた気がしたが聞き取ることはできなかつた。

?

?

?

?

ムチの音を頼りに進んでいると、もう少しあの所でムチの音が聞こえなくなつた。

それでも最後に音のした方へと進むと、ムチを持つて息を切らしている肥満体型の男と鉢合わせた。

キルアのもう1人の兄、ミルキ＝ゾルディック。

「コフー、お前誰だよ？」

「えーと、ですね……」

迂闊だつた。

コイツの存在をすっかり失念していた。

正直、見た目は強そうに見えないけど…………。

仮にもゾルディック家のの人間だから弱いはずがない。

できれば戦闘は避けたい所なのだが……。

「仕事の依頼の件で少々……」

「ああ、仕事ね。お前みたいなガキのはした金でウチが動いてくれるといいな」

嫌味なセリフを残してミルキは去つて行つた。

それにもしても”ガキ”ですか。

そんなに歳は離れていないと思つんだけどなあ。

まあいいや。

それより早くキルアに会おう。

ミルキの出てきた部屋を覗いてみると、両腕を鎖で吊されながらもグッスリ寝ているキルアの姿があった。
こんな状態でよく寝れるよなあ。

「おーい、起きてー」

「なんだよ兄貴、疲れたから休むんじゃ——」

俺の姿を見たキルアが驚きで目を見張っていた。

「ムサシ……………なのか？」

「イース。お前の知つているムサシだよ。聞いてないのか？ ゴン達も来てるぜ」

「いや、聞いてはいたけど、ここまで来るとは思わねーよ」

「はつはつはつ、安心しろ。俺以外はまだ試しの門に挑戦しているところだらーよ」

「ふーん。で、何しに来たの？」

「別に、ただ会いに来ただけだよ」

「はあ？ それだけの為に殺し屋のアジトに侵入するとか、正気じやないね」

「なんだよ、友達に会いに来るのがそんなにおかしいか？」

「…………」

「まあいいや。当分はここに居るからと、こいつでも声をかけてくれてもいいぜ」

「なつ！？ 歸れよ！ ここには毎日兄貴が来るんだぞ！！」

「大丈夫、大丈夫。ちゃんと（絶じて）隠れるから」

尚も非難の目で見てくるキルアを無視してビームが隠れるのにイイス

ペースを探した。

それから2週間弱、俺は独房に居座りキルアとお互いのことをしゃべり合つたりした。

「やつ方はともかくや、キルアって家族に愛されてるよな」

「やうか？ そんなこと一度も思つたこと無いけど……。ムサシはどうなんだ？」

「俺か？ 俺は両親が居ないからな。妹が2人いるけど、ソッチとの仲は良好だぜ……たぶん」

「親がないって、ゴンみたいに旅に出でるのか？」

「いや、殺されたよ。……俺の目の前でな」

「……悪いな。イヤなこと聞こひまつた」

「気に入るな。それより、キルアは今日ここから出でられるんだよな

「ああ、もうだけど」

「じゃあ俺、先にゴン達のところへ戻つとくな」

「そつか……じゃあな。気をつけろよ」

「おひ、また後でなー。」

独房を出ると、最短でゴンの元へ向かいつ。

「ジャンプ、壱番」

その後、ちょうど執事室へ向かっていたゴン達と合流した。

執事室に入った時は執事達から殺氣のこもった視線を向けられたがスルーした。

原作通りに「インゲームをしたが、その人質に俺が使命されたのは、俺を捕まえられなかつたハつ当たりだろか。

さらに、キルアが来るまで終始俺への視線から殺氣が消えることは無かつた……。

再び5人で集まることができたが、クラピカが自身の目的である幻影旅団を追うためにハンターとして雇い主を探すために、レオリオも医者になる勉強の為に故郷へと戻つて行つた。

9月1日、ヨークシンシティでの再開を誓つて。

「あつとこう間に3人になつちやつたね。ビーするへ。」

「ビーするって特訓に決まつてんだらう」

「え？ 何の？ あそばないの？」

「お前な——」

早速2人ではしゃいでいる所、悪い気がするけど……。

「ゴン、キルア、少しいいか

「どうしたの？ ムサシ」

「俺も故郷に帰らうと思つてね。家族にも会つておきたい」

「えー！ そんなあ

「ん、分かつた。オレ達はその間にムサシよりかもづつと強くなつてるからな！」

「おつー楽しみにしてるぜ。——ジャンプ、式番」

突然消えた俺に驚いているだらう2人の顔を見る間もなく、俺は故郷であるジャポンに跳んだ。

?

?

?

?

能力で跳んだ衝撃により真っ暗だった視界に、今度は真っ白な風景
が広がった。

おかしいな。

式番は下の妹に（内緒で）マーキングしていたはず。

疑問を感じながらも目を凝らすと、白いのが湯気であることに気づ

や、やうに下の妹の貧相な裸体が見えた所で、じこが風呂だと理解する。

下の妹は髪を洗つのに目を瞑つてゐるため、俺に気がついた様子はない。

視線を動かすと、湯船に浸かる上の妹と目が合つた。

「あら、お兄さまぢやないですか」

慌てた様子のない呑氣なあいさつをかましてきました。
まあ、兄妹だしな。

今さら裸の一つや二つくらいこびつて」とない……よな?

「姉ちやんのぼせた? 兄ちやんがいる訳ないじゃん

そう言って下の妹は髪の泡を流そうとする。

お湯が俺にもかかりそうちから避けようとして、初めて自分の身体
が動かないことに気づいた。

慌ててなんとか動く眼球を湯船の妹へ向けると、黒い笑みを浮かべ
て右手にこの世のモノとは思えない色をした花が握られていた。

『裏切り者一』

俺が視線だけで訴えると、

『自業自得ですわ』

と、墮ちた天使のような笑みで返してきた。

やつぱり怒つておられるようだ。当然だな。

「あれ…………兄ちゃん？」

髪を流し終えたらしく下の妹が俺を茫然と見てくる。

俺は全く動かない身体でなんとか笑おうとした（後の妹の供述によると超変質者のような顔になつてたらしく）

「…………」

下の妹は顔を赤くして俯かせ、右手にオーラを集めていった。

ヤバい！！ 硬はシャレにならん！！

「兄ちゃんの……………バカアアアアアアアアー！ー！」

俺は、冗談じやなく生死をさまよふことになつた。

再開誓い そして離別へ（後書き）

この後1、2話くらいムサシの家族の話をしても一クシンシティに入りたいと思います。

オリキヤラ設定

名前：ユキムラ

性別：女

出身：ジャポン

年齢：12歳

系統：特質系能力者

特技：家事

能力：占領役者

大演場

【能力解説】

【スター・マスター】
？占領役者

特質系能力

非常に限定で未来が分かる能力

自分の危機や相手の攻撃を事前に察知できる

『制約と誓約』

詳細不明

？大演上ビッグステージ

具現化系能力

詳細不明

【詳細】

ムサシの妹、コマチとは双子で次女。

けれど兄妹の中では1番しつかりしている

明るくて単純な性格なのだがなぜか特質系能力者

日常では器用だが戦闘になると途端に不器用になり武器を扱うこと
が全くできない為、戦闘スタイルは剣士ではなく拳士
兄のことは変態だと思っている

名前：コマチ

性別：女

出身：ジャポン

年齢：12歳

系統：具現化系能力者

特技：舞

能力：花麗なる理想郷

【能力解説】

?花麗なる理想郷

(フラー・ガーデン)

具現化系能力

花を中心とする植物を具現化させる

【詳細】

ムサシの妹、ユキムラとは双子で長女

落ち着いた性格、丁寧な言葉遣いに黒髪長髪な容姿とあわせて大和

撫子のような少女

けれど、私生活のほとんどを妹に任せっきりで何もできないダメ人間

ズボラなのでなく何をするにしても壊滅的に要領が悪い

兄のことは変態だと思っている

—家団樂 そして復讐へ（前書き）

文才のない私の作品ですがどうぞよろしくお願ひします

一家団欒 そして復讐へ

現在、俺達は久しぶりに家族揃つて食卓を囲んでいた。
……俺は罰として、ただ座つて妹達の食事風景を見ているだけだが
な。

ちなみに、下の妹——コキムラの渾身の一撃をモロにへり重傷
を負つた俺であったが、上の妹——コマチの『花保護な愛』で治
療してもらつことでなんとか事なきを得た。

しかし、コキムラが特質系で良かつた。

もしもゴンみたいな強化系だったら一発で昇天するところだったな。
たかが妹の裸を見ただけで殺されりゃあ割に合わねーよな。

「……なんか、もう一発殴つてやらないといけない気がする

「止めなさい、コキ。お兄ちゃんも十分反省しますよ。ねぇ、お兄
さま?」

「…………ウン、ハンセイシテイルヨ」

相変わらずウチの家系は勘がするぞい。

「…………それにしておれ、いつの間に硬を覚えたんだ」

5年前に念の修行をしているのを見つかってから俺がハンター試験を受ける為に故郷を離れるまでの間、コイツらには四大行しか教えてなかつたはずなんだけどな。

「へえ～あれ硬つていうんだ」

「…………知らないで使つていたのか」

「まあね。それより兄ちゃん、『はん食べたら組み手しそうよー』」

「組み手？ 別にいいけど…………」

「やつたー！ やつとあたしの発を試せるよー。」

「発ー？ お前、発まで覚えたのかー！」

「うんー 楽しみにしどいてね兄ちゃん。ボッコボコにしてあげるからー！」

「ユキ、死なない程度にしてあげなさい」

「…………お前ら、物騒だぞ」

覚えたての能力なんかに負ける訳にはいかないだろ。

とはいって、ユキムラは特質系能力者だから、どんな能力かは未知数なんだよなあ。

油断はしないようにしよう。

もしボロ負けなんてしてしまったら、兄としての尊厳が無くなってしまうからな。

?

?

?

?

「ルール無用の一本勝負、先に参ったと言つた方の負けです。準備

はよろしいですか？」「

「こつでもオッケーだよー」

コキムラが両拳をガチガチ鳴らしながら告げた。

戦闘スタイル自体に変化はないようだな。

「お兄さまもよろしいですか？」

「ああ。万全だ」

「了解です。では、始めてください」

戦闘開始の合図と同時にコキムラは速攻で攻めてくる。
今までのコキムラとの戦闘経験からそつ読んでいた俺は、構えをと
つたまま動かないコキムラに少し驚いた。

戦闘スタイルは変わらなくても戦略は変わったようだ。
いつまで経ってもコキムラから動く気配がない。

「なら…………こつからいくぞー」

わざと声に出しゃりとてユキムラの反応を見てみたが、微動だにしなかつた。

強化した脚力で一気に距離を詰めて、右上段から袈裟斬りに刀を振り下ろす。

ユキムラは半歩下がることで俺の太刀をギリギリでかわす。ギリギリでかわしたのは、刀を振り切つてがら空きになつている俺の頭に攻撃を加えるためだ。

だが、俺は素早く屈んで攻撃が当たらなことによじ、そのまま逆に振り下ろした刀を勢いを殺さぬまま逆に斬りあげる。

2つの斬撃を一連の動作で行つ連續攻撃——”燕返し”——

回避から攻撃に移ろうとしていた相手は返しの斬撃に反応する」とができない、必中の技。

しかし、俺の刀は空を斬ることになった。

ユキムラが、初めから攻撃に移る気がなく回避だけに全力を注いでいたからだ。

解せない。

兄妹だからある程度俺の技は知られているが、それはこの家で伝えられてきた「一天一流の技だけだ。

”燕返し”は俺自身が編み出した技、それを初見で見切られたのは腑に落ちない。

「どうしたの兄ちゃん。どんどん来なよ！」

あの態度も気になる。

ユキムラは自分からガンガン攻めていくタイプだった。
……このことも、アイツの念能力に関係しているのかもしねいな。

俺はユキムラの念能力を確かめるために再びアイツに接近する。その途中で『追爪する五つの印』を発動して、俺はユキムラの背後へ跳んだ。

もちろんこの能力について教えてはいない。
だからこれは完璧な不意打ちであり、反応できるはずがない。
だが、ユキムラの背後に跳んだ瞬間、俺の目の前にはユキムラの拳が迫っていた。

盾の自動防御が間に合ったおかげでなんとか防ぐことができた。

「意外と堅かつたなあー。ぶつ壊せると思ったのに

ユキムラはそう言って手をブラブラと振っている。

今の言葉で確信した。

アイツの念能力は瞬間的な未来予知！

ユキムラの発言からすると、盾が具現化することが分かつていた。だが、これは有り得ない。

アイツには盾の具現化などを見せたことはない上に、そもそも俺の系統は強化系だと教えているからだ。

未来予知なら初見の技を見切つたり知らないはずの能力による不意打ちにカウンターを合わせることができたのにも納得がいく。

そして、おそらくだがアイツが未来から得れる情報量は多くはない。盾の具現化が分かつっていたのに、それを殴った結果を予知できていないのがその証拠だ。

とはいえ待ちの態度をとる未来予知能力者を迂闊に攻めたらカウント一をくらうだけだ。

ならば対抗策は1つ。

わかつていてもどうしようもない攻撃をするまで。

左足を前に。

刀を持つ右手を顔の横まで上げ。

左手は添えるだけ。

防御を捨て一撃必殺を必定とした攻撃特化の構え。

——“蜻蛉”。

オーラを振り上げた刀へと収束させる。
今から繰り出すのは、”蜻蛉”的構えからの『剣の風』。
その速さは稻妻にも匹敵する。

神速不可避の一撃——”雲耀”——。

凝縮されたオーラに悲鳴を上げる刀を、今までに振り下ろしたこと

「参りました——！！」

コキムラの迅速かつ賢明な判断により、その刀が振り下ろされることはなかつた。

?

?

?

?

組み手の後は3人で反省会することになった。
ユキムラの能力は俺の予想通りに未来予知だった。
制約は厳しいけど強力な能力には違いない。

俺の方もバレてしまつた能力の詳細を話すことになった
もちろん肝心なところは上手くはぐらかしておいた。

それから毎晩、俺は妹達に修行をつけてあげた。

ユキムラには流を教えコマチには具現化の指導をしてやつた。
2人ともゴンやキルア程ではないにしろかなり才能があつたので順
調に成長した。

来年は2人ともハンター試験を受けるらしい。

なので戦闘技術だけでなく幅広い技術を教えることにした。

そうしてオークションまでの時間を潰していた時、近隣の村からあるウワサが聞こえるようになった。

そのウワサの内容は、全身に包帯を巻いた男が再び（・・）現れ、村を襲い大人の住民と虐殺しているというもの。

10年前も同じようなことがあり、この村も襲われて俺の両親はソイツに殺された。

……俺は静かに、復讐の機会が訪れたことに歓喜した。

一家団欒 そして復讐へ（後書き）

タイトル詐欺にならないように
テコ入れで念能力より剣術に力を入れてみました
次回も戦闘です
拙い文章力ですが、少しでも満足していただけるように努力したい
と思います

炎熱地獄 そして死闘は（前書き）

どうぞよろしくお願ひします

炎熱地獄　そして死闘は

暗闇に包まれた山道を一人で歩く。

俺の村から山一つ越えた所にある村に向かうためだ。予測が正しければ、そこに奴が——全身包帯の男が——現れるハズだった。

奴が村を襲う時は必ず夜であることも考えて、奴を決して逃がさないため、こうして夜に奴が襲撃する村へ向かっていた。

それでも、奴が予測通りに行動していなければ無駄足になる行為ではあった。

しかし、あることから奴が目的の村にいることを確信する。

血の匂いだ。

既に麓の方から強烈な血の匂い、助けを呼ぶ悲鳴、狂喜に染まつた笑い声が俺の元まで届いていた。

俺は直ぐに駆け出した。

暗闇で周りが見えないためアチコチにかすり傷ができる。だが、その程度はまったく氣にもならなかつた。

そうして1分も経たずに村へ着く。

その瞬間、円を使わずとも強力な念能力がいることを察する。俺は、やはりと思った。

俺の両親は常人としては最強の部類だったにも関わらず殺されたことから、奴は念能力だとずっと考えていた。

10年前は未熟だったために正確には分からなかつたが、今ならア

ノ全身包帯男の強さがよく分かる。

おそらく上位のハンターと匹敵するレベルだろう。

それでも俺は臆することなくオーラを感じる方向へと行く。

そして、俺は長年待ち望んだ相手と対面した。

近くの街灯が、たった今握り潰したのであらう頭部の返り血で全身を被う白い包帯を血にそめる男を照らしていた。
その光景を見た俺の心は、怒りではなく喜びで満ちていた。
おそらく、怖氣のする笑みを顔に浮かべているだろう。
そして頭の片隅で2人の妹を置いてきて良かつたと考える。
こんな復讐鬼オレをアイツらには見せたくない。
そして、目の前の奴が口を開く。

「…………ガキには用はねーんだ。せつせとどつかに行きな

俺をまつたく相手にしない態度に生まれた怒りを、"コイツだけは俺が殺らなければならない"という思いで抑える。
そして、努めて冷静に告げた。

「ガキじゃねえ。俺はプロハンターだ」

「ああん？ ハンターだと？」

奴は驚いたといつもりは信じられないといつ反應をした。

「おつかしいなあ。賞金首にならぬよつこわざわざこんな下田舎の奴らを殺つてたのによオ」

……クズめ。

「ガキは殺らねー主義だが、ハンターとなつたら別だ。悪イがテメーには死んでもうぜ」

「やつてみろよ、殺人鬼!!」

満月の下、凄絶なる死闘の幕が開けた。

?

?

?

?

「炎だと！？」

その考えは一瞬で砕け散る。

刀剣は、奴に触れることなく溶けていった。

俺は動搖を隠し、慌てずに全力で凝を行い、我が目を疑った。

最初に凝で見た時には存在しなかつたものが、奴を包み込んでいた。

殺つた！！

奴が戯れ言を吐いている内に本命の用意を済ませる。
それは、奴の上空に具現化して浮かべている111本の刀剣。
万が一に備えて隠も施されているそれらを落とす。
『剣の雨』が、隙だらけの奴へと殺到する。

「ほう？ 具現化系の能力者か」

両手に1本ずつ刀を具現化させる。
今回はいつもの刀を持たずに来たからだ。

そう、奴は巨大な炎を纏っていた。

「正解だぜ。よく見えたじゃねーか、隠には自信があつたんだぜ」

「信じられない…………」

生半可な凝では見抜けない隠で炎を見えなくしていたこと。
それはまだいい。

信じられないのは、念能力で炎を使うこと。
おそらく変化系能力でオーラを炎に変えているのだろうが、どんな
生き方をすればそんなことが可能になるのか。
奴の容姿から推測できるのは…………。

「――その包帯の下は火傷か？」

「おお！ またまた正解だぜ！ 中々察しがイイじゃねえか！」

「…………」

「そんだけ賢けりや一分かるよな？ テメーの剣は俺の『劫火堅爛』
には通用しねえ。つまりテメーに勝ち田が無エってことがよオ！！」

言葉が終わると同時に右腕を突き出され、

巨大な拳と化した炎が放たれた。

「くつ——」

俺にできる限界の力で、最高硬度の盾を具現化する。

しかし、奴の炎の拳の前にあつさりと溶解し、まったく防御の役割を果たすことはなかつた。

それでも目眩ましにはなり、炎の拳のから逃れることはできた。だが、俺の精神に安堵が訪れはしなかつた。

炎の拳の射線上のものはことごとく灰へと帰し、さらに背後の俺の越えてきた山は焦土と化していた。

変化系能力者にはありえない威力に、ただ茫然とその光景を眺めることしかできなかつた

「テメーなら今ので気づいただろーが俺の本領は放出系だ。その気になればこんな村一つぐれえなら一撃で灰に変えてやれるんだぜ。とつとと諦めたらどうだ?」

さすがに奴の言つことが誇張なことぐらい分かるが、無視できない威力であることは先ほど証明された。
おそらく掠るだけで、いや、余波の熱だけでも体が焼かれるかもしれない。

「…………なめんじやねえよ」

それでも、10年前から決めていた。

”俺”が最初に殺す人間は、お前だと

「そーカい。仕方ねーな、オレの名前はシシオだ。冥土のみやげに持つていきな」

奴^{オーラ}が炎を収束して変形させる。

その炎は、ハンマーのよつなものに形成されていく。

「――火槌・火産靈神」

火神の鉄槌が、ムサシに向けて投擲される。

ムサシは避けようともせず、その場を動かない。

彼の知る所ではないが、例え避けても『火槌・火産靈神』は着弾地點を中心に周囲へこめられた炎を爆散させる放出系として――むしろこちらの方が本命――の能力でもあり、なんにせよムサシは絶体絶命だった。

彼の右手から刀がこぼれ、地面に落ちて消える。
端から見れば、もはや戦意喪失の証だった。

——左手にもう1本の刀が残されていることを除けば。

「奥義——”一之太刀”——」

摂氏3000度を超える温度の炎を、鋼の刀が切り裂いた。
形状を保てなくなつたことで炎が霧散していく。

もしこの炎が本物であつたならば、ムサシに為す術はなかつただろう。

しかし、この炎はオーラによるもの。

『右手に剣を左手に盾を』に隠された”オーラを斬る力”の前では

紙切れ同然であった。

「ちいっ、何しゃがつた！？」

シシオの焦つた怒鳴り声が響く。

ムサシは氣にも留めずによつくつと駆け出した。

「くそつたれが！！——火銃・焰靈」

毒つきながらもシシオは、新たに3つの炎弾を撃ち出した。

「奥義——”無明剣”——」

高速で放たれた”三段突き”により炎弾は散る。

そしてムサシは、駆ける勢いのままにシシオへと高く飛びかかった。空中へと飛び上がったムサシを前に、シシオも口の炎を極限まで高めていく。

お互に次の一撃に全てをかける。

「へりえやー！——火技・大文字ーー！」

——”金翅鳥王剣”——

大の字の炎が放たれる。

途轍もないオーラがこめられていた。

それでも、ムサシの刀により一刀両断される。

ムサシは落下速度を利用して、炎を斬つた勢いのまま、シシオの身体を斬り裂いた。

「が——つああああああーーー！」

断末魔の叫びを上げながら、シシオを自棄クソに炎を辺りに撒き散らして死んでいった。

当然、正面にいたムサシも左手が炎に焼かれていた。
自棄になつて放たれた炎であつたため変化の精度が甘く、そこまで炎の温度が高くなかったのが救いだつた。

だが、焼かれた左手にも気づいてないかのようにムサシは心にこ在らずといった様子だった。

「やつた……殺つたのか……」

ボソリと言葉が紡がれる。

復讐を果たした彼から喜びは感じられることがなく、

「……気持ち悪い」

あるいは、人を斬った感触への恐怖だけだった。

炎熱地獄 そして死闘は（後書き）

拙いバトルシーンをご覧いただいてありがとうございます。

さて、包帯男はオリキャラ、というかるる剣から容姿と名前と能力を拝借させていただいたキャラでした。
ボノレノフだと思った人はいますかね？

少し強くしそぎた『劫火堅爛』ですが、制約としては15分以上使うと自分の身体が発火するリスクとかあると思います。

シシオだけに。

放出系の能力がムサシの第一チート”オーラ斬り”と相性最悪だったのが運の尽きでした。

放出系能力者が少ないので比較は難しいですが、シシオは放出系能力はレイザー以上、変化系能力はG・I・終了時のキルアと同等以下といったところです。

サヨナラ そして再会へ（前書き）

今更ですが、ムサシの家は大きめの武家屋敷です。

サヨナラ そして再会へ

漆黒の帳が降りた空に浮かべた盾に乗り、死闘の舞台となつた村を見下ろす。

村は勢いを衰えさせる様子を見せない炎によつて、じりじりと焼かれていた。

まるで業火に燃える地獄を俯瞰している氣分だ。

——念能力者の死後の怨みによる念の強大化

今ここで地獄を作り上げている原因。

それにより、シシオが死に際に放つた炎は一向に衰えること知らず、村を燃やし続けていた。

おそらく助かつた人間はおらず、村もこのまま灰燼と帰すであろう。

「…………」

今も炎に焼かれている人、既に炎で命を奪われてしまった人へ向けて、黙祷を捧げる。

——自分のせいで村の人々を死なせてしまったのではないだろうか。そんな気持ちが、俺の心に影を落としていた。

俺が戦いを挑まなければ、少なくとも子ども達の命だけは助かつたかもしけない。

…… アイツの言葉を信じるならば、だが。

…… 終わったことを後悔しても仕方がない。

そう思い込むことで、ひとまず自分の気持ちに無理矢理にも整理をつける。

―― ジャンプ、参番

未だ顕現し続ける炎熱地獄を尻目ににして、俺はたった2人の家族の元へと帰った。

？
？
？
？

既に夜明けも近いこの時間帯。

まだ幼い妹達が寝ている時間帯でもあるため、普通なら寝室へと跳ぶはずだったのだが、気づくと俺は庭に佇んでいた。

……まあ予想していた故の参番だつたんだけどな。

なんてことを考えながら、屋敷の縁側に腰を下ろして一いつ匁を見つめる相手へとあいさつをする。

「ただいま」

「ええ。お帰りなさい……お兄ちゃん……」

立ち上がりて上品に姿勢を整え、ママチャがあいさつを返してくれる。

「こいつから待っていたんだ?」

「お兄さまがいっかり家を出てからずっと……です」

「まいづたな。バレないように黙り遣つて出て行ったつもつだつたんだけどな」

「お兄さまが私に隠し事なんて……100年早いです」

「フツ……違いない」

表情や感情の操作は得意なのだが、どうしてもこの妹だけには俺の嘘も秘密も見破られてしまう。

ママチャはさらに、静かに冷えきった空気を切り裂くように質問を繰

り出してくる。

「では、こんな夜更けにお兄さまは何処へいらっしゃっておられたのですか？」

「……夜道を散歩にな」

「そうですか……お兄さまはただの散歩で、お召し物を血に染められるのですね」

「…………」

うつかり自分の格好をわすれていた。

どう答えればいいか分からず、沈黙せざるを得なかつた。

「……そういえば、この近辺で殺人鬼再来のウワサがありましたね」

先に沈黙を破つたのは、やはりコマチだつた。
しかもしつかりと核心を突いている。

「お兄さまは殺人鬼さんに会いに行つたんですね？」

「まあ……お前の言つとおりだよ」

「動機は……何ですか？」

「動機？」

「はい。正直、お兄さまは積極的に殺人鬼さんを退治するような正義気質の人間であるとは思えません。お兄さまは常に受け身姿勢の

「ヘタレ変態野郎ですか！」

「変態は余計だ！」

「他は否定できないことが情けない。

ところが、いくらなんでも俺の評価が低すぎるだろ？

兄の威儀もへつたくれもないではないか。

「…………こすれ、コキも一緒に話すよ」

「…………大方の予測はつこてこますナビ……。今は聞かないでおいてあげまや」

「ん、わざわざ」

「…………けれど、お兄わざは他にも何か言わないといけないことが有るのではないか？」

「…………まつたく」

「…………ながら声のトーンを落とすコマチに罪悪感を感じながらも告げる。

「…………やう、ですか」

「…………夜明けには、また旅にでる」

ほとんどの僅かながら声のトーンを落とすコマチに罪悪感を感じながらも告げる。

今日の日付は8月1日。

俺の目的を果たすには、今日がタイムリミットだった。

「ユキにも……ようしゃくを聞いてくれ」

「はい……」

「お前がお姉ちゃんなんだからな。頼んだぜ」

—— したところ、コマチの凛然とした声に呼び止められる。

「…………待つて！」

「…………これを」

—— そつと、コマチから一輪の花を渡される。
元々4枚の花弁から一枚が欠けてしまっている花だった。

「…………ありがとな」

ポンッと低い位置にある頭に手を置き、サラッと撫でる。

「それじゃ、行ってくる」

黎明に染まり始めた空を見上げ、今度こそ別れを告げた。

「……こつてうつしゃこませ」

背後から「マチの声を耳に入れながら、

——ジャンプ、四番」

別れの呪言を紡いだ。

雇用面接 そして脱出へ（前書き）

マークシング編を書き終えるのが待ちきれなかつたです。
最低月1で更新していきたいと思います。

雇用面接 そして脱出へ

再び故郷を出た俺は、予めコンタクトを取つておいた仲介所に斡旋してもらい、ノストラード組の身辺警護雇用契約の面接会場へと赴いていた。

面接会場である館の呼び鈴を鳴らすと、おそらくこの館の使用者であろう老人が出てきた。

この使用者の案内に従つて屋敷を進み、控え室へ到着した。老人に続いて俺も入室する。

控え室には、既に5人の契約候補者——正確には3人だが——が集まっていた。

どうやら俺はクラピカよりも前に来てしまったようだ。

それに対して、俺が部屋に入った瞬間から全員の視線が俺に集中しているのを感じる。

それぞれがどんな意図を持つて俺に視線を向けているのかは知らないが、少なくとも好意的なものは感じられない。

俺は極力視線を無視して、ソファーへと素早く座り込む。

「おい、ガキ」

いきなり声をかけてきたオツサンに対しても黙殺する。

俺をガキなんて呼ぶ奴と話す必要性はない。

まあ、ガキであることに違いはないが、明らかに見下されている感じがしたから、これでいい。

「チツ……」

オッサン（確かバショウだつたか？）は舌打ちをして、すぐに俺から興味を無くしたようだ。

何故ならバショウが舌打ちすると同時に、控え室のトビラが開いたからだ。

使用者の後ろから、金髪で右手の五指に鎖を装備し、独特な民族衣装を身に纏つ少年と青年の間ぐらいの姿の奴が入って来た。

——クラピカだ。

クラピカはサッと部屋を見渡し、俺と田代が合つて、僅かばかり動搖していた。

だが俺の方が特に反応しないようにしていたため、クラピカもすぐに動搖を押さえ込んで近くのイスに腰を下ろした。

全員が揃つたのだろう。

使用者がモニターのスイッチを入れる。

モニターに、女を侍らせてあたかもボスであるかのように男が映し出される。

男から雇用について、組の望むものを手に入れてくるように条件を出された。

使用者から条件を満たすものに関してのデータカードが配布される。周りの奴らと同じように、俺もデータカードをチェックしてみると、どれもこれも気分の悪くなるようなものばかりだ。

さすがは人体収集家といったところだろうか。

これが年端もない娘の趣味であることがまた、傑作だ。

面接はこれで終了して、みな早速目的のものを手に入れて来るため外に出ようとする。が、

「？ 開かねーぜ」

控え室のトビラに鍵が掛けられていた。

『一つ伝え忘れたが……』強いことが雇用の最低条件だ。その館から無事出られるくらい“最低”な

モニターの男の言葉と同時に、外側からトビラを剣で突き破り、黒装束の人間がなだれ込んで来た。

さらに黒装束は、剣だけでなく銃まで使って攻撃してきたが、クラピカの鎖によつて防がれていた。

俺の方にも、剣を持つた黒装束が3体襲いかかって来る。

この俺に剣で挑む…………念能力とはいえない度胸だ。

俺は右腰にある本物の刀ではなく、左腰にある具現化しておいた刀を鞘ごと背中まで持つていく。

「居合奥義——『離弦の太刀』——」

背後に回した刀を勢いよく引き抜いて、3体の黒装束をまとめて斬

り裂く。

ならば、と銃を持った3人の黒装束が一斉に発砲してくる。

「フ――ツ――！」

放された弾丸3発を全て、剣術の”矢返し”を応用させ、黒装束へとそのまま弾き返す。

自分の弾丸に撃ち抜かれた黒装束は、その正体がオーラを詰められた人間風船である故、あっさりと破裂する。

これで半分は仕留めた。

残りの黒装束も迅速に始末しようと考えていると、

「ヤツらを止める。3秒待つ」

既にクラピカが黒装束を操作していた能力者を捕らえていた。

さて、俺の実力を”潜入者”を通してノストラード組にアピールする目的は達成した。

アレだけ見せつければ契約を嫌がる理由も無いだろう。つまり、この館にこれ以上残っていても意味は無いな。

「ジャンプ、四番」

俺は他の奴らに見られないよつとして一足先に館を脱出した。

Side - クラピカ

「シテ！」
「嘘だ？」

「どうした？」

突然、私の横にいた小柄な男が何かに驚きだした。

「なんだと!?

部屋にいる人数を確かめる。

他の皆も慌てて各自の存在を確認し始めた
確かに1人居なくなつていて

したもそれは

「確かだな。サムライ野郎がいねえな」

「サムライってなによ?」

「オレの国で剣を使う戦士だよ」

「それって…………あの、銃弾を弾き返していったボウヤのことね。確

かにあの子の姿が見えないわね」

そう。

彼が……予期せぬ再会となつたムサシが居なくなつていた。まず、ここに彼が居たこと自体が驚きだが、さうこそ誰にも気づかれずに居なくなるとは……。

いや、今はそれよりも、この場で私が彼と知り合いだという情報を明かすべきかどうか……。

「そのサムライの子だけど、居なくなる直前に『ジャンプ、四番』と言つっていたわ。何か分からなかしら？……特にあなた？」

小柄な男が私を指差した。

「…………なぜ、私なのだ？」

「あなたの心音、居なくなつた彼の話になつた時、心音が不自然な鼓動をしていたわ。しかも、今のあなたは迷いの旋律を感じさせる。何か話すべきかどうかって思つていることがあるんじやないかしら？」

「？」

「……こじまで見抜かれているとは…………。

「どうなんだ？ 知つていてるのか、知らねえのか？」

「……彼は同期のハンター試験合格者だ。能力については何も知らない。しかし、それはさほど重要なことではないだろう。いま重要なのはもう一人の潜入者を見つけることだ」

「…………嘘は吐いてないわ」

「そりゃ。なら、言う通りに潜入者を見つけよう」

「……私が調べよう」

ムサシ…………どうして君がここに居たんだ。

一体、何を考へているんだ……。

雇用面接 やして脱出へ（後書き）

批評お待ちしております。

蟻編、どう収束するのだろうか？

競売開催 そして襲撃へ（前書き）

今回と次回、キャラ＆スキルのクロスがあります。
名前と能力と容姿だけで、人物設定は全くの別物であることをご了承下さい。

競売開催 そして襲撃へ

現在俺達は数台の車に分かれて、飛行場からヨークシンシティを目指している。

俺の乗る車は運転席がバショウ、後尾座席がリーダーのダルツォルネとボスのネオン嬢、助手席が俺だ。

ボスの車に乗せてもらえるとは新人の中でも評価は高いようだ。念の為に言つておくと、俺を含む5人の候補者は、無事にボディガードとして採用された。

「おい、ムサシ」

「何だ？」

隣りのバショウが声をかけてきた。

採用が決定した時にお互い簡単な自己紹介は済ましておいたので、名前と能力ぐらいは知られている……とは言つても、俺は『追爪する五つの印』しか能力は教えていない。

同じ仕事をする仲間とはいえ、俺にとつては一時的なものに過ぎない予定だからな。

そう易々と自分の手札を見せたりはしないし馴れ合いもしない。

だがバショウは同じ国の出身もあり、かなり気が合つ。コイツとだけはそれなりに友好な関係を築いていた。

因みにクラピカとはまだしつかりとは話していない。

「あの娘はよ……オレ達のボスは古い師。しかも、途轍もない凄腕だという話だ」

「ああ。偶然会得した念能力によるものらしいね。それにしても未
来予知とは……さすがは特質系能力だな」

「おいおい、オメーがそれを言つのか？ オレに言わせりや、瞬間
移動だってかなりリアな能力だぜ」

「その分、制約がメントド臭いんだよ」

俺はチラッと右手の爪を見る。

今は人差し指と中指にだけ数字が刻まれていた。

「ま、そんなことより俺達はしつかりとボスを守つて競売を成功させ
ることだけを考えなきゃね」

「そんなに心配することはねーゼ。オレは何度かこういった仕事を
こなしてきたが、大抵は何事もなく終つたからな」

「何事もなく…………ね」

後部座席へと振り返つてみる。

リーダーであるダルツォルネが、ネオン嬢の占いを見て険しい顔を
している。

やはり、変わることなく幻影旅団の襲撃はあるみたいだな。

…………氣を引き締めないとな。

今から俺は、自ら死地へと赴くのだから。

?

?

?

?

ヨークシンシティのあるホテル

俺達は今後の護衛団の方針についてのミーティングを行っていた。
本来ならば、競売に参加するボス——ネオン＝ノストラード——の
護衛と競売の監視に分かれる手筈だった。

しかし俺とリーダーのみが知ることだが、ネオン嬢の能力で競売への参加が命の危険に繋がるという内容の予言が為されたため、急遽予定を変更し、競売に参加する組とボスをホテルで護衛する組に分けることとなつた。

組み分けはこうだ。

——ネオン護衛

ダルツォルネ、スクワラ、イフレンコフ

——競売担当

ヴェーゼ、シャツチモーノ、俺

——正面口側監視

クラピカ、センリツ

——裏口側監視

バショウ、リンセン

俺は競売担当となつた。

競売の知識など無い俺が選ばれるとは……。

単純に評価されているのか、捨て駒にされているのか。
原作の展開的には後者の可能性は割と高い。
まあ死ぬ気は毛頭無いけどな。

さて、競売へ向かう前に1つだけやって於かなれば……

「クラピカ」

「……ムサシか」

俺を避けるようにして、いたクラピカに、敢えて自分から話し掛ける。

「なぜ俺を避けるか知らないが、どんな事があるか俺とお前は仲間だ。……もちろんゴン達もだ」

「……」

「だから、あまり何でも一人で抱え込もうとするなよ。」

「……ああ」

俺の伝えたかったことは全て言った。
クラピカなら気づいてくれるだろう。
本当に大切なものが何であるかという事に。

——地下競売会場

豪奢な部屋に、黒のスーツを着た厳つい面構えの男の群衆がひしめいていた。

まさに有象無象の集まりと言つたところだろうか。

正直、かなり自分という存在が場違いに感じられる。

「なんだい、坊や。緊張しているのかしら？」

「……別に。ヴォーゼさんじゃ、周りが男だけで内心ビクついているんじゃないの？」

「あら、そんなこと無いわ。余裕よ」

ヴォーゼさんとちょっととした軽口を交わす。
緊張気味の俺に気を使ってくれたのだろう。
さすがは大人の女性だ。
……性格に危ない一面が有るけど。

——そんな、少し、心に安心を覚えた時だった。

「『おやっ』『どうしてこんな所に子供がいるのかな?』」

俺の全神経を震わせるような寒気を発せせる声が聞こえた。
バツと後ろへと向き直ると、俺以上に場違いな、黒の学生服に身を
包む少年がいた。

見た目は俺よりも2、3年上といったところだろうか。

「『僕に言えた事じゃないけど』『ここは子供が来るような所じゃ無いと思つんだけどな』

コイツの言葉が耳に入る度に、頭の中で警告音がけたたましく鳴り響く。

俺は今すぐこの場から全力で離脱したい衝動に駆られる。

——「コイツと関わると何もかもがダメになつてしまつ。

そんな予感がした。

「……ノストラード組に何か用でもあるのか？」

俺を庇つようにシャツチモーノさんが前に出てた。
どうやらコイツのおぞましいオーラは俺にだけ向けられていらしく、隣りの2人は何も感じていなかつたようだ。
しかし俺の前に立つたシャツチモーノさんは、その瞬間、サッと顔色を青くし、僅かに身体を震わせていた。

「『うーん』『組じやなくてこの子個人に興味があつたんだけど』『何かお話しできる様子じゃないみたいだし』『今回は”ツキ”が無かつたみたいだね』」

そう言つて学生服の少年はクルリと身体を反転させた。

「『それじゃあ』『”ツキ”が合つたらまた会おう』」

不穏な言葉を残し、少年は去つていった。
同時に、緊張で固まつていた身体が一気に弛緩する。
そのまま座り込んだりしない様に、膝に力を入れてなんとか立つた姿勢を維持する。

初めて感じるオーラだった。

強大さだけなら少し前に戦ったシシオに遠く及ばない。

精々中堅ハンターと同じ程度だろう。

だが、殺人鬼であつたシシオをも遥かに上回る程に、不気味で禍々しいオーラだつた。

「ちょっと。どうしたのよ2人とも」

「いや……何でもない。大丈夫か？ ムサシ」

俺より早く回復したシャツチモーノさんが心配そうに声をかけてくる。

「……大丈夫です。それより、もうすぐで競売が始まってしまはずから」

まだ心に残る不安と恐怖を押し殺し、今は競売へと集中する様にした。

それから数分が経ち、競売の開始時刻となつた。
ざわざわとした空気が忽然と静寂に移り変わる。

そして、舞台に巨躯と小柄のミスマッチな組み合わせである2人の

男が出て来た。

……いつでも能力を使えるように、精神をベストな状態へと持つていき、それを維持する。

「皆様、よつこをお集まりいただきました」

ただ只管、絶対堅固の盾をイメージする。

「それでは、堅苦しいあこがれはぬきにして

..... 来る！

「——くたばるといこね」

宣告と同時に、巨躯の男の十指から連續で念弾が放たれる。集まっていたマフィアの人間は、急な攻撃に対応できずに次々と撃ち抜かれていく。

「オレの背後に伏せろ！――『縁の下の11人』！」
イレブン・ブラック・チルドレン

シャツチモーノさんが念を込めた風船黒子でガードを試みる。

だがその行為が無意味であることを知っている俺は、第2の防御として『右手に剣を左手に盾を（ナイト・オブ・オーナー）』を発動させ、最大限強化を施した盾を具現化させる。

具現化した盾によつて、『縁の下の11人』をあつさり貫通して俺達に襲いかかる念弾の嵐は全て防ぎきつた。

ないだろ？

一応、俺の能力は秘密にしているので、盾は隠によって見えない状態にしているからだ。

そして、弾幕が止んだ。

俺達は死体に紛れ込むことで姿を隠していた。
だがバレるのも時間の問題だろう。

「シャツモーノさん、ヴェーゼさん、俺が合図をしたら急いで逃げて下さい！」

「……お前はどうするつもりだ？」

「時間を稼いだ後、合流します。今はこの状況を外に知らせること
が最優先です。……俺には瞬間移動があるから大丈夫ですよ」

俺の言葉に2人は無言で頷く。

……後は逃げ出すタイミングだ。

シズクが死体を一掃した時、俺が奇襲を仕掛けて旅団の虚を突き、
その隙に2人には脱出してもらおう。

「この部屋中の散乱した死体とその血・肉片、および死人の所持品
全てを吸い取れ！！……ついでに椅子も」

——よし！

「今だ！！！」

俺は前に、2人は後の出口へと駆ける。

「ハアアアア————！」

先手必勝とばかりに、2本の刀を両の手に創造し、全速力で目標へと疾駆する。

——この時、俺は失念してしまっていた。

たつた1つの計算外が存在していたことを

競売開催 そして襲撃へ（後書き）

めだかボックスから負完全のあの人が出ました。

一応、マイナス組は全員出すつもりです。

元のチート能力をハンター世界で矛盾等が無いように上手く設定し直していきたいと思います。

バショウの口調は、自分には表現できなかつたです（悲）。

霜月の死 そして新生へ（前書き）

お気に入り件数が300件を越えていました。
まだまだ至らない自分の作品を読んで下さりありがとうございました。
どうかこれからもよろしくお願ひします。

霜月の死 そして新生へ

満天に星々が散りばめられている夜空を、1機の気球がふわふわと、とある集団を乗せて飛行していた。

その集団の名は、

幻影旅団。

熟練ハンターでさえ迂闊に手を出せない、団員全てがA級賞金首の超極悪盗賊団である。

そんな彼らこそが、世界中の闇の住人であるマフィア達によつて仕切られている地下競売に急襲を仕掛け、宝を全て奪い尽くそうとした者共だ。

しかし、彼らは困惑している。

何故なら、彼らが盗もうとしていた競売品の全てを、自分達よりも先に持ち出されてしまったた。

つまり、彼ら……幻影旅団の作戦が失敗してしまったのだ。それどころか、手痛い仕打ちを受けてしまうハメとなつた。

「フュイタン、大丈夫?」

無表情かつ、あまり心配そではない声音で問つているのは、メガネを掛けた黒髪の少女——シズクである。

ちなみに、本当に心配していないのではなく、単に表情や感情の起伏が現れにくい性格なだけだ。

「痛みはないよ。けど、全く問題ない訳ではないね」

答えたのはフェイタンと呼ばれた、小柄な体格ながらも眼光を鋭く光らせている黒マントの男だ。

「オーラ量の上限が減てるし、発が使えなくなるね。十中八九、これの仕業に違いないね」

そう言つてフェイタンが示したのは、彼の身体のド真ん中に突き刺さつてゐる一本の螺子であつた。

「くつくづく、情けねえなあフェイタン」

「ノブナガの言つとおりだ。そんな急所に敵の攻撃を受けるなんて、お前らしくも無い」

そんな彼を、旅団の特攻隊員である強化系コンビのウボオーギンとノブナガが揶揄する。

2人共強化系らしい直情的な性格をしている。

「当たり前ね。これは攻撃をくらたワケでないよ。恐らく私だけが何らかの条件をクリアしてしまったね」

ムツとした様子でフェイタンは反論する。

確かに地下競売の行われる予定だった部屋に居た3人の中で、誰も直接攻撃を受けてはいないにも関わらず、フェイタンだけがこの状態に陥つてしまつたのだ。

しかも、現状ではこの螺子を抜く手段を、彼らは持ち合わせていかなかつた。

「何にしても……あの螺子野郎はブチ殺し確定ね

ただでさえ鋭い眼差しをさらこ細めながら、恨みと殺意の籠もつた声でそう呟いた。

？
？
？
？

そんな幻影旅団の乗る気球を追う数多くのマフィア達の中に、クラピカの乗るノーストライド組の自動車の姿があった。

彼らもまた、幻影旅団を捕まえて褒美を得ようと企んでいるのである。

そんな中、クラピカは全く別のことへと思考を回していた。
競売に参加していたムサシの行方と安否についてだ。

クラピカ達が異変に気づき、競売会場へと押し掛けた時には既に何百人といた競売参加者と競売品である宝は忽然と姿を消し、戦闘があつたことを証拠付ける傷跡のみが残されていたのだつた。

そして、ムサシや他の2人からも連絡が入らない様な現状では、彼らが無事である見込みはほとんど無かつた。

競売の襲撃犯が念の使い手であり、その能力で競売の参加者を丸ごと連れ去っているならまだ希望はある。

だが、死体ごと消し去るような能力だった場合は

「…………つ」

脳裏に浮かんだ最悪な想像を振り払う。

ムサシはそう簡単に死んでしまう様な奴ではない。

クラピカはそう信じて、ただただムサシの……掛け替えのない友人の無事を祈り続けた。

?

?

?

?

時を同じく、ヨークシンシティの一角。

ノストラード組の幽霊会社ビルの前に1人の男が佇んでいた。

ムサシである。

彼は、簡潔には説明し難い道程の果てにこの建物へとたどり着いたのであった。

「ふう……取り敢えず、ボスに連絡しこうか」

契約した時に支給された携帯電話を取り出そうと、ポケットをまさぐつてみたが、目的の物を探し当てる事はできなかつた。おそらく先の騒動で紛失してしまつたのだろう。

「……参ったな」

やる」とも無く、手持ち無沙汰になつたムサシの思考は、自然と地下競売会場で起きたイレギュラーな事態へと馳せられた。

.....

3人の旅団に真っ直ぐに突っ込んでいたムサシは、己の直感が知らせるがままに、直進していた身体に制動を利かせて元の位置へと戻るように、全力で後方へ跳んだ。

その反射に近い行動は功を奏し、天井を貫いて霰の如く降り注ぐ螺子の弾丸に巻き込まれることを回避した。

ちょうど螺子の雨の中心地に居た旅団3人は、それぞれ念弾や具現化した掃除機、念で強化した素手で対応していた。

そんな、不測の事態に戸惑っていたムサシに、一度聞いたら忘れない、あの声が囁かれた。

「『やひー』『わひわ振つだね』

あの不吉なオーラを発する少年が、あらうひとか自分の肩に手を置き耳元で囁いてくる。

そんな状況に、ムサシは思わず漏れそうになつた悲鳴を慌てて飲み込んだ。

「『ひいひい』『今は怖がつてこないでしょ』『早くこ
こを脱出しなへぢやー』

そう言つて不吉な少年は、右手を振り上げる。
これから一体この少年が何をするつもりか予測の付かないムサシは、
緊張から身を堅くする。

そして、少年は宣言した。

「『ひいひー』『シブキひやこー』

まさかの他力本願であった。

「任せな大将！！」

上の階より、一人の少女らしき人物が、ムサシ達の側へと降り立つた。

「ブチ壊れろ！」

『ペイントバイインター
痛絵無悲』

「！」

競売会場の床に亀裂が走る。

そして床は完全に崩壊して、ムサシ達は下階へと落下を始めた。

「『ナイス、だぜ！』『シブキちゃん』」

「ど一致しまして」

「『それじゃあ』『ここから脱出しようか』」

「脱出つて！ 何処からだよ！？」

あまりのムチャクチャ振りにムサシは堪えきれずに叫ぶ。

「『心配ないよ』『こんな事もあるつかと』『地下に抜け道を掘つておいたからさ』」

「……」

少年の由々しきと、ムサシは閉口を禁じ得なかつた。

そして、少年 クマガワといづらじい に従つて地下の抜け道より脱出し、彼らと『また会おうね』と言つて（こひらは断固拒否だ）別れ、ここへと至る。

道中、何故あんな事をしたのか聞いてみたりもした。

「『それはね』『あの怖い人達に用があつたのさ』『幻影旅団ついで怖い集団なんだけどね』『ちょっと暴れ過ぎだから』『さしづめ警告つて所かな』『君も』『危ないことにあまり首を突っ込むなよ』」

と言つていた。

警告、か。

……マフィアが陰獸とは別に雇つたのだらうか？

取り敢えず原作からのイレギュラーとして頭の隅には置いておくとしよう。

そうやつて過去を回想していると、前方よりノーストライド組の車がやって来た。

車から全員が降りるのを待つてから、俺も出て行く。俺の姿を確認して、みんな驚いていた。

「リーダー、ムサシです。只今帰還しました」

「ムサシか!? 他の2人はどうした?」

「…………おやう、死亡したと思します」

俺の言葉を聞いたダルツォルネは、一瞬だけ顔を曇らせたが、直ぐに表情を戻して告げた。

「報告!」苦労だ。それより、コイツを運ぶのを手伝って欲しい

ダルツォルネは、鎖を巻き付けられた大男 ウボオー、ギンを指差す。

「コイツは?」

「競売会場の襲撃犯だ」

「…………ですか」

知っているが、一応聞いておく。

そして、さり気なくウボオーギンの首へと手を伸ばし、触れる。

「殺すなよ。これから拷問するんだからな」

「……了解です」

さすがに目を付けられたので、手を引っ込める。

ふと、視線を感じたので振り向くと、クラピカが俺を見つめていた。

自分の復讐に巻き込まれないように距離を置いていながらも、心配していたことが目から読み取れた。

俺も、心配するなど視線で返し、早速作業へと移った。

拷問の結果、分かったことは幻影旅団は競売品を盗んでいないということだけだつた。

ただ、シャツチモーノとヴェーゼの分はクラピカだけでなく俺も殴らせてもらつた。

見張りに付くリーダー以外は、それぞれ休みを取つていた。

俺は、メールを見てビルを出ようとしていたクラピカに声をかける。

「……行くのか？」

「ああ、私は行く。ムサシ、君はこれ以上私に関わるうとするな。
次は、死ぬぞ」

「……」

無言を肯定と受け取ったのか、クラピカは一人で出て行ってしまった。
……俺には、ゴンのように言葉で人の心を動かすことは難しいようだ。

そして、数刻が経つた時。

「くそオオオオオ――オ――」

野太い、野獣のような叫び声が轟いた。

「今のは!?」

「おそらく拘束していた旅団だわ！」

「自力で解いたのか！？ ガスも使っていたのに……」

「落ち着け。奴が拘束を脱したのは確実だろう。俺達は一刻も早くここを逃げ出すべきだ」

慌てている仲間達に落ち着きを促し、逃亡を提案する。

「そうね。もしかしたら仲間が助けに来たのかも知れないわ。心音が複数ある。……『ミユニティ』の人間かと思っていたんだけど」

「今は気にするな。早く逃げるぞ」

俺達は旅団にバレないようビルを脱出し、車で移動を開始した。

そうして俺達が逃げ落ちたのは、ネオン嬢の泊まっているホテルだった。

ネオン嬢が泊まっている関係上、警備体制はここが最も整っていたからだ。

そして、まずはネオン嬢を通して、彼女の父親であり組の首領でもあるノストラード氏へと指示をいただくことになった。
その代表者にはクラピカが選ばれた。

ノストラード氏の指示から、ネオン嬢を守る方向で方針は固まった。もし旅団がプロハンターサイトを使う可能性を考慮して、ボスであるネオン嬢の部屋を移すこととなつた。

クラピカを1人残して。

それから少しして、クラピカと巨大なオーラの持ち主がホテルから出て行くのを感じた。

「大丈夫かしら。クラピカ……」

センリツが心の底から心音をひたすく。

「正気じゃねえよ。あんな化物を一人で迎え撃つなんて」

「ああ……無謀なことだ」

他の仲間達からも、口々に後ろ向きなことばかりしか言葉を出でこなかつた。

「……そんな事はない。クラピカは勝算のない戦いをするような奴じゃないさ」

ムサシは、少しでもみんなが前向きになれるように言葉をかける。

そんなムサシに、センリツは疑惑を感じていた。
何故なら。

彼の心音から感じられるのが

達成感だったからだ。

？
？
？
？

人気の感じられない荒野。

とある復讐者と戦闘狂の戦いが行われた場所である。

結果は、復讐者が勝利し、仲間の情報を最後まで守り抜いた戦闘狂の死で戦いは終幕した。

そしてこの場には、復讐者の慈悲によつて地に埋められた戦闘狂の死体があるのみ のはずであった。

突如、地面が爆発した。

巻き上がる砂煙の中から、人影が姿を現す。

死んだはずのウボオーギンであった。

「…………あ

まるで深い眠りから覚めたかのように呻きをあげる。

「フウ、…………これがオレの身体か…………」

生まれて初めてこの身体を動かすかのように、拳を開いたり閉じたり、肩をぐるぐる回してみたりする。

「…………悪くない

一言、感想を呟く。

そして、彼は人気のない荒野の大地へ第一歩を踏みしめた。

霜月の死 そして新生へ（後書き）

最後のあれは前の主人公設定を見ていた方には想像がつくかも知れませんが、一応以前とはかなり別物になっています。過負荷の能力の詳細は作中で明かすか、手っ取り早く設定をあげるのどちらがいいでしょうか？

追伸

Fate/zeroのPV見ていたら以前書いた型月の小説の前日譚を書きたくなってきました。
ハンター優先だけれど、もしかしたら書くかも。

オリキヤラ紹介（前書き）

過負荷4人組のプロフイールです。
所々はまだ不明の状態になっています。
物語の進行をお待ちください。

オリキヤラ紹介

名前：クマガワ

性別：男

出身：流星街

年齢：18歳

系統：特質系能力者

能力：螺旋乖弾

却本作り

【能力詳細】

?螺旋乖弾（ヒンバラレット）

具現化系能力

螺旋子を具現化する能力。

かなり頑丈かつ巨大なものを具現化できる。

具現化される螺旋子は全て + 螺旋子。

他に特別な効果はない。

?却本作り（ブックメイカー）

特質系能力

螺旋乖弾で具現化した螺旋子に触れた相手に発動。

対象の胸に突き刺さった状態で - 螺旋子が具現化される。

却本作りを受けた者は、発が封じられ、オーラ量が常にクマガワと同じになり、念の系統による威力・精度・修得度が特質系能力者と

同等になる。

名前：シブキ

性別：女

出身：流星街

年齢：16歳

系統：特質系能力者

能力：彩色兼美

痛絵無悲

【詳細】

オーラベイント

? 彩色兼備

変化系能力

自分のオーラの色を変えることができる。

赤・青・黄・緑・白・黒・金・銀・銅の9色まで。

? 痛絵無悲
ペインペインター

特質系能力

自分のオーラに触れている物にダメージを与える。

ダメージの種類はランダムで、ダメージの威力は対象の身に付けて

いる色と自分のオーラの色の比率によって上下する。

名前：ガガマル

性別：男

出身：流星街

年齢：17歳

系統：不明

能力：不明

【能力解説】

不明

名前：ムカエ

性別：女

出身：流星街

年齢：15歳

系統：変化系能力者

能力：荒廃した花

【能力解説】

? 荒廃した花 （ラフレシア）

変化系能力

凝によって両手にオーラを集中させた状態で触れた物体を腐らせる能力。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2698v/>

サムライHUNTER

2011年9月28日06時44分発行